

石川県立看護大学附属地域ケア総合センター

事業報告書

第14巻

平成28年度

石川県立看護大学附属地域ケア総合センター

巻 頭 言

地域ケア総合センターは、開学以来、石川県立看護大学の性格を特徴づける存在として歴史を刻んでまいりました。学生・教員の両者が看護教育に必須の地域生活に関する具体的知識を学ぶ拠点であり、また大学の知を地域に還元するための拠点でもありました。広く石川県という枠で地域を捉え、県下の人材や施設との交流も積極的に行なってまいりました。

一方で、日本では平成26年11月に成立した、まち・ひと・しごと創生法のもとに、少子高齢化の進展への的確な対応、夢や希望を持ち、潤いのある豊かな生活を安心して営むことができる地域社会の形成、地域社会を担う個性豊かで多様な人材の確保等が求められています。本学のような小さな大学も平成27年に文部科学省が採択したCOC+事業「金沢・加賀・能登で地域思考型教育による夢と志を持つ人材養成」の一員として地方創生に貢献すべく歩み始めています。いかに地域を住みやすくし、活力を維持するかを考えると、あらためて本地域ケア総合センターのこれまでの活動や実績が“地方創生”の考え方を先見的に持っていたかを思わずにはられません。

さらに本学では“地方創生”よりもっとミクロな“地域創生”に目を向け、大学の地元やそれよりも不便な地域で、まちを知り、まちと協働で活動を作り、ひとを育てることを行ってきました。またそのためには国際的な視野から日本を見つめなおすことも重要と考え、国際交流にも継続的に力を入れ、JICA北陸に協力すると同時に、教職員・学生のグローバルな視野の広がりにも役立てています。これらは、学生が地域（そこがどんな辺鄙な場所であろうとも）で暮らすことの意義を知り、いつかそれを支え工夫する看護職になってくれるものとの期待も込めて行なっています。

近年は、国の施策により大学と企業や行政との連携も強調されるようになっていきます。本学では、数年前からこのセンターを通じて看護からの発想が企業・行政に生かされることや、企業・行政の技術や知識を知って看護に新たなイノベーションを起こすことなどを模索しています。企業・行政、そして大学の双方にまだ十分な相互理解が進んでおらず、形になるのはまだ先と思われますが、この方向性は今後に向けても推進したいと考えております。

この報告書で平成28年度にどのような活動があったかをご覧ください、忌憚のないご意見をうかがえれば幸甚に存じます。

石川県公立大学法人 石川県立看護大学
学長 石垣和子

地域ケア総合センター「事業報告書（第14巻）」発刊に寄せて

日頃から地域ケア総合センターのさまざまな事業にご協力いただきありがとうございます。

この度、石川県立看護大学附属地域ケア総合センターの事業報告書（第14巻）を発刊する運びになりました。地域の皆さまにはご一読いただき忌憚のないご意見やご要望をいただければと思います。

さて平成28年度も地域ケア総合センターでは従来どおり「人材育成」、「地域連携・貢献」、「国際貢献」の3本柱でさまざまな事業を展開してまいりました。

専門職研修としては昨年度に引き続き「複数の事例へのアプローチ ～高度実践看護師から学ぶ～」と題した公開事例検討会をはじめ、教員の専門性を活かした人材育成事業を開催しました。

地域貢献事業では、新たにかほく市、イオンモールかほくと連携させていただく形で「か歩く健康ウォーキング事業」に取り組むことができました。多くのかほく市民に参加していただき、改めて健康意識の高さを実感しました。

国際貢献事業のうち、JICA 青年研修ではカンボジアから15名の研修生を受け入れました。そこでは文化の違いを感じながらも、カンボジアの将来のリーダーとして予防医学、公衆衛生、地域医療、地域医療連携をキーワードとした関連施設の視察と講義を受けていただきました。

これ以外にもさまざまな事業を開催し、多くの皆さまに足を運んでいただけたことを本当にうれしく思います。各事業の詳細については各報告をご覧ください。

地域ケア総合センターでは臨床現場や関係機関、自治体のニーズをよりきめ細かく把握し、それに応えられるような事業を展開していきたいと考えています。平成28年度にはじめたメールマガジンをより活用し、地域の皆さまにより新鮮な情報を提供していきたいと考えています。

今後とも地域ケア総合センターの各事業にご理解とご協力をお願い申し上げます。

地域ケア総合センター長 武山雅志

目 次

(ページ)

1	人材育成事業	
1-1	専門職研修	
1-1-1	複雑な事例へのアプローチ～高度実践看護師から学ぶ～	1
1-1-2	ケアのデザイン「手のケアを見直す」	3
1-1-3	訪問看護の現場に活かすフィジカルアセスメント	5
1-1-4	症状・フィジカル・検査からの臨床推論	6
1-2	本学教員主催の研究会・事例検討会	
1-2-1	ジェネラリストのための事例検討	7
1-2-2	ペリネイタル・グリーフケア検討会	9
1-2-3	子育て支援・虐待予防に関する勉強会	11
1-2-4	高齢者ケア・研究事例検討会	12
1-2-5	がん看護事例検討会	13
1-3	相談サービス事業	
1-3-1	各種研修会等への講師派遣事業	15
1-3-2	病院への事例・活動・研究等の指導助言実施状況（再掲）	17
2	地域連携・貢献事業	
2-1	地域連携事業	
2-1-1	来人喜人（きときと）健康創りプロジェクト事業	19
2-1-2	健康応援倶楽部・健康増進モデル事業	20
2-1-3	「歩くスモールチェンジ」健康づくり	21
2-1-4	棚田が織りなす食・緑・健康の郷づくり	22
2-1-5	いきいき美人大学校	23
2-1-6	モールウォーキング事業	24
2-2	生涯学習講座	
2-2-1	子育て支援学生ボランティア事業	25
2-2-2	被災地ボランティア活動	26
2-2-3	限界集落における閉じこもり予防活動	27
2-2-4	鳴子の音楽運動療法による元気いきいき教室（介護予防）	30
2-2-5	あかちゃんをお空へみ送った方の自助グループに対するサポート活動	32
2-2-6	祖父母の楽しい上手な孫育て教室	34
2-2-7	子育て どろっぷ・イン・さろん	35
2-2-8	お母さんと子どものためのアートセラピー体験	37
2-3	ワンストップサービス事業	38
3	国際貢献事業	
3-1	JICA 日系研修「高齢者福祉におけるケアシステムと人材育成」コース	39
3-2	JICA 青年研修「地域保健医療実施管理」コース	44
4	その他	
4-1	かほく市との包括的連携協定に関わる取り組み	49
4-2	石川県委託事業・協力事業「介護職員による喀痰吸引等の研修事業の実施協力」	51

1 人材育成事業

1-1 専門職研修

1-1-1 複雑な事例へのアプローチ～高度実践看護師から学ぶ～

1. 事業の目的

高齢者であるがん疾患看護の事例検討会を開催し、がん看護 CNS、老年看護 CNS、NP がそれぞれの視点での事例の看護を考え、意見交換を通して参加した看護師がディスカッションをすることで、看護の考え方を学ぶ機会とする。

2. 実施状況

日時：平成28年9月22日（木・祝）10：00～12：00
場所：石川県立看護大学（大講義室）
座長：牧野智恵（石川県立看護大学 成人看護学 教授）
川島和代（石川県立看護大学 老年看護学 教授）
コーディネーター：がん看護専門看護師
清水 奈緒美（神奈川県立がんセンター）
パネリスト：診療看護師
吉田 弘毅（国立病院機構災害医療センター）
がん看護専門看護師
村上 真由美（富山赤十字病院）
老人看護専門看護師
森垣 こずえ（金沢医科大学病院）
事例提供者：高野 智早
参加者：50名

H28年度 公開事例検討会
複雑な事例へのアプローチ
～高度実践看護師から学ぶ～

【コーディネーター】
神奈川県立がんセンター がん看護専門看護師
清水 奈緒美氏

【パネリスト】
国立病院機構 災害医療センター 診療看護師 (NP)
吉田 弘毅氏
富山赤十字病院 がん看護専門看護師
村上 真由美氏
金沢医科大学病院 老人看護専門看護師
森垣 こずえ氏

【事例提供者】
高野 智早氏

【座長】 石川県立看護大学 教授
牧野 智恵氏 川島 和代氏

参加費 無料

託児無料
※託児を希望される方は、お申し込みの際にお知らせください。
申込 9/7 (木)

平成28年 9月22日 (木・祝日)
10:00～12:00 (受付 9:40より)
対象：看護職80名
会場：石川県立看護大学(大講義室)

【お申し込み・お問い合わせ先】 石川県立看護大学
石川県立看護大学附属地域ケア総合センター
（会場：第3号）
〒929-1210 石川県かほく市事業部1丁目1番1号
TEL: 076-281-8308 FAX: 076-281-8309
Eメール: 看護部@shikoku-nurse.ac.jp

【お申し込み・お問い合わせ先】 石川県立看護大学
石川県立看護大学附属地域ケア総合センター
（会場：第3号）
〒929-1210 石川県かほく市事業部1丁目1番1号
TEL: 076-281-8308 FAX: 076-281-8309
Eメール: 看護部@shikoku-nurse.ac.jp

【お申し込み・お問い合わせ先】 石川県立看護大学
石川県立看護大学附属地域ケア総合センター
（会場：第3号）
〒929-1210 石川県かほく市事業部1丁目1番1号
TEL: 076-281-8308 FAX: 076-281-8309
Eメール: 看護部@shikoku-nurse.ac.jp

申込締切 平成28年 9月12日(月) 定員に達した次第、締め切らせていただきます。

北陸高度がんプロチーム養成基盤形成プランとの合同企画で、「複雑な事例へのアプローチ～高度実践看護師から学ぶ」を開催した。昨年度に引き続き、他領域の専門看護師と共に公開事例検討会を開催した。今回の事例では、疼痛コントロールに課題をもっている高齢者のケースであった。

まず、参加者は「本事例の何に着目し、どのような支援を考えるか」についてグループに分かれて検討した。事例は、疼痛コントロールに難渋しやすい病態である上に、患者本人のコミュニケーションの力の脆弱さ、複雑な社会背景等が絡み合い、問題が複雑化していた。また、これらの状況が、今後の療養についての意思決定に影を落とし、関わる人々の戸惑いにつながっていることが推測された。会場からも、「疼痛コントロール」「社会的な側面への支援」「意思決定支援」に着目し、支援を考える意見が多く出された。

引き続いて、高度実践看護師から、それぞれ「フィジカルアセスメント」「全人的な視点での疼痛コントロール」「高齢者の意思決定支援」に焦点をあてて発表がなされた。事例の課題に即して実践のヒントを提供する内容で、先の会場のディスカッションに応える流れになった。

全体ディスカッションは、短時間ではあったが、主に「高度実践看護師の実践知を、日常の現場でどのように得られるか、活用できるか」が話題となった。

最後に、事例提供者から、ケースのその後について、行われたケアとその結果が報告され、高度実践看護の具体的な実践例として、先のプレゼンテーションと共に複雑ながん患者への関わりについて学習ができたのではないかと思う。

3. 事例検討会の成果

今回の事例のように、老年期のがん患者の中には社会的側面に大きな課題を抱えながら、今をどう生きるかに悩みながら生活している人も多い。それを支援する看護師も自身の専門領域だけに捉われることなく、各専門の高度実践看護師と協働し、より良いケアにつなげることが望まれる。

がん看護の質の向上を図るため、日々のがん患者様やそのご家族への看護実践の中で遭遇する困難事例について、施設の垣根を越えて意見交換を行うことを通して、北陸 3 県のがん看護の質の向上を図るケアの専門家としての実践力を育成・向上する場となった。

1-1-2 ケアのデザイン「手のケアを見直す」

1. 事業の目的

片麻痺患者の拘縮した手指の清潔ケアの方法等を紹介し、手のケアの価値を見直す。また、手浴ベースンの開発例を通して、患者・介護看護者のニーズから介護・看護用具のデザインについて考える。

2. 実施状況

回	開催日時	テーマ・講師	参加人数・所属施設
1	H28. 8. 6(土) 13:30-16:00 石川県立看護大学 基礎看護学実習室	第1部 手を用いたケアを見直す 藤田 三恵 金城大学看護学部	10名参加 医療機関、介護施設 教育機関、その他
		第2部 脳血管障害患者の手の清潔ケア 中田 弘子 石川県立看護大学 大学院看護デザイン分野	
2	H28. 9. 25(日) 13:30-16:00 地域ケア総合 センター研修室	看護・介護用具のデザイン 小林 宏光 石川県立看護大学 大学院看護デザイン分野	3名参加 所属：介護施設、教育機関

3. 実施内容

第1回目は8月6日(土)の午後に基礎看護学実習室を会場に開催した。

第1部では、「手を用いたケアを見直す」と題したテーマで、金城大学看護学部藤田三恵教授に講義を頂いた(写真1)。看護師のケアの実態について文献データから、清潔ケアの実施理由は感染予防の目的が一番多く、爽快感などの快の刺激を目的としたものは1割程度にとどまっていると説明された。清潔ケアを行う目的の中に、治療効果を高め、病気からの回復過程を促進する効果を意図して看護職等に浸透させていく重要性について語られた。具体例として難病の80歳の男性患者、表情も乏しく会話も困難、筋固縮もみられた患者を看護学生が担当した事例を紹介された。手浴をはじめ手を用いたこまごまとしたケアを積み重ねたところ、交感神経緊張状態を緩和させ、副交感神経優位な状態をつくりだし、表情が豊かになり、声を出して歌を歌われるようになった過程を講義いただいた。患者の変化の事実を通して手を用いた温かなケアが良い変化をつくりだす有効な方法、手を用いたケアの意義を深く理解できた。

第2部では、本学の大学院看護デザイン分野、中田弘子准教授により「脳血管障害患者の手の清潔ケア」と題したテーマで、脳血管障害患者の手の清潔ケアに関する研究成果に基づいた講義が行われた。脳血管障害患者の手の清潔を保つためのケアの優先度は決して高いとはいえないこと、それが、どれほど患者や家族の自尊心を低下させていくか、一番側にいる介護・看護職が想像力を働かせる重要性を語られた。手の汚染状況を客観的データで示しながら、ケア方法や用具を開発し提案していく過程は介護・看護職共通に納得できたと思う。

今年度も講義だけではなく、ベッドに臥床して実際に手浴ベースンを用いて手のケアを体験してもらった(写真2)。その気持ちよさに手のケアの重要性をより深く理解できたとの感想が述べられた。現場での応用をさらに期待したいと考える。



写真1. 藤田教授の講義



写真2. 手浴ベースンを用いた手のケア

第2回目は、9月25日（土）に「看護・介護用具のデザイン」というテーマで石川県立看護大学人間科学領域・大学院看護デザイン分野 小林宏光教授により講義が行われた。看護におけるデザインとは、「ヒト（患者）をとりまくさまざまな要因を考慮してよりよい看護のシステムを提案していくということ」と述べ、Nightingale の看護の定義と関連づけて説明された。看護のデザインとして療養環境・用具等の改善（KAIZEN）の意義とプロセス、問題の発見と解決のコツについて、具体的な用具や機器の開発例を紹介しながら講義された。小林教授は「身のまわりの小さな問題をバカにすることなく、解決にはできるだけ単純化を図り手間を増やさないことがコツである」と強調され、看護には小さな改善の積み重ねの重要性を指摘された。ケア用具の開発のヒントを提示いただいたと考える。

4. 評価と今後の課題

両研修会後、参加者の聞き取りからはほぼ全員が「満足」「わかりやすかった」との回答が得られ、実線での活用についても肯定的な意見が聞かれた。今年度は研修のPRが不足していたため参加者が少なかったことが課題であった。今後の研修開催のPR方法について工夫が必要であると考える。

しかしながら、石川県立看護大学の大学院修士や教員の研究成果を活用した公開講座を開催していくことは大学の研究成果の社会への還元という視点でも重要な取り組みであるとする。

今後は、他の研究分野・内容における公開講座も企画していくことが課題である。

1-1-3 訪問看護の現場に活かすフィジカルアセスメント

1. 事業の目的

訪問看護の基本は、利用者のフィジカルアセスメントを行い、それを踏まえた上でケアに繋げることである。そのため、訪問看護の基本技術であるところのフィジカルアセスメントを訪問看護師自身が見直し、訪問看護現場の実践で活かせるフィジカルアセスメントを身につけることを目的としている。

2. 実施状況

日 時：平成 28 年 6 月 11 日(土)10:30～16:00、

場 所：石川県立看護大学 基礎看護学実習室

テーマ：訪問看護の現場に活かすフィジカルアセスメント

ー訪問看護分野の特定看護師の看護実践ー

講 師：光根 美保 氏（JA 大分厚生連、訪問看護ステーションつるみ 係長、特定看護師）

参加者：訪問看護師 12 名

3. 実施内容

「訪問看護で活かせるフィジカルアセスメント」（講義）（演習）

4. 評価と今後の課題

アンケートの結果は、参加者の訪問看護歴は 1 年未満 7 名、1-5 年 2 名、6-10 年 1 名、16 年以上 1 名、不明 1 名と、訪問看護歴 1 年未満が最も多かった。研修内容は、今後の訪問看護活動対し、「参考になった」と答えた人 11 名（92%）、「どちらでもない」1 名（8%）であり、参考になったという意見がほとんどであった。意見や感想では、『フィジカルアセスメントの講義・演習』に対しては、「これまで聞いた講義の中で一番良かった」「実際の聴診の仕方など、疾病による注意点などを交えて説明してもらえて良かった」「演習があり、とてもわかりやすかった」等があった。『今後の訪問看護活動への活かし方』に対しは、「兆候を見つけて受診をすすめるために、フィジカルアセスメントをもっと細かく丁寧にとらないといけないと感じた」「フィジカルアセスメント、情報を利用者から得る大切さが実感できた」等があがった。フィジカルアセスメントは、訪問看護の基本技術である。本研修の講義・演習では、フィジカルアセスメントから、症状別の臨床推論へとつなげる実際をおこない、それが訪問看護現場の実践に活かせるものとなった。参加者の意見からも訪問看護実践にとって有益な研修であるが、広報活動が不十分だったため少数の参加となった。今後は広報活動の方法を検討してゆく必要がある。

1-1-4 症状・フィジカル・検査からの臨床推論

1. 事業の目的

一人ひとりの患者に相応しいケアを判断するには、患者の症状とバイタルサインを含めたフィジカル所見から病態を正しく推論することが必要となる。加えて、多忙な日常において見過ごされがちな検査所見から情報を得ることができれば、より良い看護の根拠として活用することが出来る。この観点から、事例を通して特に一般的な血液検査に親しむ機会を提供することを目的とした。

2. 実施状況

日時：平成28年9月3日（土）13:00～16:00

場所：石川県立看護大学附属図書館2階ガンバルーム

テーマ：症状・身体所見・検査からの臨床推論

ーフィジカルアセスメントから臨床検査までー

講師：多久和典子（石川県立看護大学 健康科学講座 教授）

3. 実施内容

第1部 血液検査に関する基礎知識の情報提供（ミニレクチャー）

第2部 症例検討（臨床推論）：事例について、症状・フィジカルアセスメントと検査データから全員で病態をディスカッションし、解説を加えた。

4. 評価と今後の課題

臨床推論の経験豊富なベテラン看護師から入職1年目の新人看護師まで、大学病院・地域の急性期基幹病院・訪問看護ステーションから6名の看護師の方々の参加をいただき、和やかに推論を展開することができた。参加者からは、血液検査はマスターしたと思うので今度は画像について教えて欲しいという要望や、このようなセミナーを受けたいと思う看護師は大勢いるはずで広報が不十分ではないかというご指摘を受けた。来年度は広報の仕方を工夫するとともに、画像に関する基礎知識の提供とさらに豊富な事例を準備して臨みたい。

1-2 本学教員主催の研究会・事例検討会

1-2-1 ジェネラリストのための事例検討

1. 事業の目的

本研修会の目的は、自分の実践は看護になっているのか、もっとできることがあるのではないかと疑問を抱いている看護職を対象に事例検討を行い、ジェネラリストとして人間の見つめ方が幅広くなり、看護の目的に照らしたアセスメントの実施、さらにはクリティカルな思考過程を培い実践力向上をめざすことである。

2. 事例検討の目標

事例検討の目標は、事例提供者である看護師が自己の看護実践をふり返り、看護が実施できたのか自己評価できること、また、参加者は患者や家族の立場、事例提供者の立場にも立ちながら事例の理解を深め、自分の看護実践に活用できる指針を得ることである。患者や家族の立場、事例提供者の立場に立って考えることができれば、ジェネラリストに重要なさまざまな対象の立場から状況判断する能力を高めることにつながる。

3. 実施内容

(1) 対象者

県内の医療施設等に勤務している臨床看護師、看護教員、看護学生

(2) 開催日ならびに内容

第1回目 平成28年7月24日(日) 13:30~16:00 地域ケア総合センター研修室

テーマ 自己の看護実践、教育実践を振り返る①

チューター 中田弘子、川島和代他4名 計7名 参加者：38名 総数45名

内訳 所属：医療機関 38名

経験年数：1~3年目12名、4~10年11名、10年以上14名、無回答1名

第2回目 平成28年11月26日(土) 13:30~16:00 地域ケア総合センター研修室

テーマ 自己の看護実践、教育実践を振り返る②

チューター 川島和代、中田弘子他4名 計6名 参加者：31名 総数37名

内訳 所属：医療機関27名、学生2名、訪問看護ステーション1名、無回答1名

経験年数：1~3年目12名、4~10年9名、10年以上11名 未経験1名

(3) 事例検討会の進め方

本事例検討会では、参加者から提供された事例を通して事例検討を行っている。事例検討は、グループ討議が中心であり進行は各グループを担当するチューターが担った。チューターは事前に資料を読みグループワークが発展するよう意見の引き出し役を担う。

本学教員が全体進行役として、「看護とは」に照らしながら対象の特徴と看護の方向性をグループの発言からまとめ、さらに事例提供者の看護実践を全体でふり返り、事例提供者自身が自己評価できる手助けを行っている。参加者もグループ討議の中で自分のアセスメント力を高め、他者の実践を通して学ぶことができることを意図している。

事例検討の素材となる事例は、事例提供者ならびに施設の許可のもと使用している。当該事例の個人情報個人が特定されないよう必要最小限の事実を精選した。また、終了後は事例の情報が記載された資料はナンバリングし回収、回収後シュレッダーしている。

(4) 事例検討会の実際

平成28年度は、2回の事例検討会に2事例が提出された。事例の概要と提供の理由について

下記のように示す。事例提供者は医療機関に勤務する中堅看護師からの事例提供であった。2回目は実践経験のない看護学生や1～3年目の看護師の割合が多かったため、経験年数を考慮しグループ編成を行った。

回	事例の概要と事例提供の理由
第1回目	事例1：A氏 60歳代半ばの男性、BMI23.6。慢性腎不全（腎硬化症）、高血圧、左下葉の肺がん。元職人、現在はアルバイト（肉体労働）し生計を立てている。90歳代の母親（要介護4）との2人暮らし。A氏は今後、血液透析の導入が予想される外来通院患者である。シャント造設術を受ける前に面談を行いシャントについて説明を行っているが、患者は「介護が必要な母親がいるしどうしよう。母親の心配がなければ入院できる。仕事をやめると言われると病院に来られない。」と述べる。A氏が治療に専念でき、自分のからだを大切にできる人生を送れるよう支援するにはどのように関わったらよいか考えたい。
第2回目	事例2：B氏 50歳代後半女性、BMI20.0、先天性自律神経失調症／起立性低血圧にて失神発作頻回（ベッドの挙上だけでも意識消失）、心肺停止蘇生後他。専業主婦、夫と高校生の娘2人の4人暮らし。心肺停止後家族によって蘇生され、入院となる。内服加療、心リハ、呼吸リハを行い、徐々にADL拡大した。医師からこれ以上の治療・治癒は見込めないとされている患者を、なんとか自宅へ退院できるよう支援したが、これで良かったのか、良かったとしたら何が良かったのか評価できるよう振り返りたい。

(5) 参加者の反応（事例検討会後のアンケート結果より）：

第1回目 2016.7.24

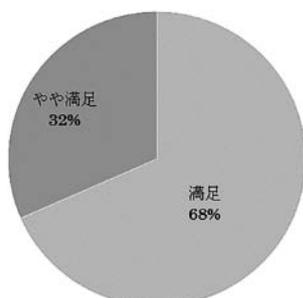


図1. 事例検討の満足度

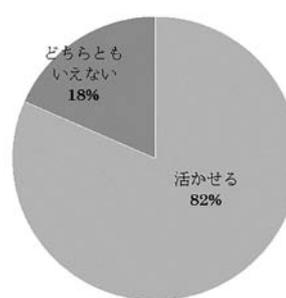


図2. 看護実践への活用

第2回目 2016.11.25

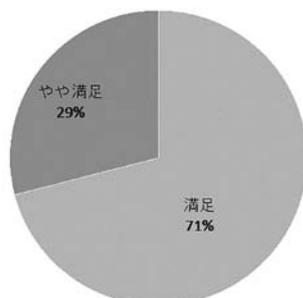


図3. 事例検討の満足度

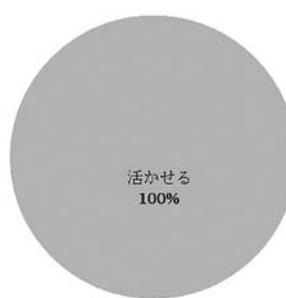


図4. 看護実践への活用

4. 評価と今後の課題

事例検討は、事例提供者の実践を通して参加者間のグループダイナミクスが働くと、アセスメント力が高まり、事例提供者の実践から経験年数の少ない看護学生や看護師も具体的な看護を学ぶことに意義がある。経験の豊かな看護師のフィジカルアセスメントにもとづいた判断や優れた実践を取り上げると学びが深まる。さらに魅力的な学習の場づくりが課題である。

1-2-2 ペリネイタル・グリーフケア検討会

1. 事業の目的

県内の周産期の死に関わる看護職者がケアの現状を話し合うことで、体験者の経験を共有するとともに教員等から新しい情報を得ることによって臨床における周産期のケアの充実を図る。

2. 実施状況

日時：第15回 平成28年7月9日（土）13:30～16:00

第16回 平成29年2月18日（土）13:30～16:00

場所：第15回 石川県立看護大学 母性・小児看護学実習室

第16回 石川県立中央病院 大研修室

参加者：第15回 54名（産科・NICUに勤務する助産師・看護師47名 内企画委員7名）

第16回 31名（産科・NICUに勤務する助産師・看護師26名 内企画委員5名）

講師：米田 昌代（石川県立看護大学 母性看護学 講師）

曾山 小織（石川県立看護大学 母性看護学 助教）

協力：桶作 梢（金城大学）、工藤 淳子（石川県立中央病院）、河村 淳子（まなぶクリニック）

森田 智恵、宮本 律子（金沢大学附属病院）、水口 真理、舩本 陽子（金沢医科大学病院）、北濱 まさみ（富山福祉短期大学）

3. 実施内容

今年度のテーマ：「進んでいる施設のケア・連携を学ぼう」

第15回：「染色体異常児出生にまつわるケア・連携～妊娠中の寄り添いから入院中のケア・在宅医療・グリーフケアまで～」

まず、富山で発足した「富山周産期グリーフケア検討会」について、発足者の富山福祉短期大学の北濱まさみ氏より説明をしてもらった。その後、本日のメインテーマである福井県立病院 NICU 看護師の藤田智子氏より「染色体異常児出生にまつわるケア」を紹介していただいた。全体での活発な質疑応答の後、グループに分かれて、それぞれのグループ入っていただいた福井県立病院のスタッフの方と交流していただき、各施設での課題と対応策について話し合っていた。最後にいくつかのグループに話し合った内容を発表してもらい、全体共有した。

第16回：グリーフケア外来

始めに米田より前回の振り返りを行った後、現在米田が受講しているグリーフケア専門士について紹介した。研修報告として米田と企画委員の桶作氏より10月に開催されたぎふ周産期こころの研究会、企画委員の工藤氏より12月に開催された東アジアグリーフの集いの報告を行った。その後、本日のテーマである「グリーフケア外来」について新潟大学医歯学総合病院の助産師の森山幸枝氏と藤田沙緒里氏に進行をお任せした。

最初に講師の方の自己紹介があり、参加者1人1分位ずつ自己紹介と本日の会への期待を話し、和気あいあいとしたムードの中、会は進行した。講演内容は参加者の状況をふまえ、グリーフケアの基本から、病棟でのケア、そしてグリーフケア外来へのつながりについてであった。外来を立ち上げる上での周囲の巻き込み方等実際の運営面等質疑応答により、深めていくことができ、その後、実際にグリーフケア外来で関わった事例についてご報告いただいた。最後に各グループで情報交換、意見交換を行い、会を終えた。

4. 評価と今後の課題

第15回:

参加者は県内外 54 名であり、これまでの最高人数を記録し、質疑応答も活発になされ、各グループの話し合いも有意義なものとなっていた。感想に「進んでいる施設のケアをたくさん知ることができ、他施設の方と交流・情報共有できてよかった」と多くの参加者が回答しており、内容についても満足 61.7%、ほぼ満足 36.2%と満足度が高かった。グループワークの時間が少なかったという意見もあったので、より効率的に話ができるような工夫をしていきたい。

第16回:

感想に「グリーフケア外来の存在や実際のケアを詳しく知ることができてよかった」、「立ち上げたスタッフの熱意のすばらしい」があり、内容についても満足 92.3%、ほぼ満足 7.7%と満足度が高かった。全体での質疑応答が活発になり、グループで話合う時間が少なくなってしまうことで、30分時間が超過してしまった。アンケートでは80%以上がちょうどよいとされていたが、遠方からの参加者もいるため、時間配分には注意を払っていきたい。

全体:

どちらの企画も協力者である企画委員は、企画に対する意見提示、グループワークの進行、まとめの記録、グリーフケアに関する他の研修の参加等積極的に関わってくださっている。今後も企画委員を中心として臨床のニーズに即した内容で企画していきたいと考える。参加人数は昨年から増加傾向である。来年も年度始めに関係機関にちらしを配布することとする。会場は石川県立中央病院が来年度から使用できなくなるため、検討する必要がある。

1-2-3 子育て支援・虐待予防に関する勉強会（事例検討会等）

1. 事業の目的

地域や医療現場での子育て支援や虐待予防に関するケア経験を共有し、よりよい関わりに向けて研鑽する。

2. 実施状況

参加者：子育て支援・虐待予防に興味がある看護師、助産師、本学大学院修了生、大学院生、母性・小児看護学教員、保健師等

場 所：石川県立看護大学 教育研究棟 3階会議室

3. 実施内容

回	開催日時	テーマ	事例提供者	参加者数
1	平成 28 年 8 月 4 日(木) 18:30~20:00	自殺未遂後の中学生と家族への支援	小児看護 専門看護師	13 人
2	9 月 10 日(土) 10:30~12:00	気になる母親への支援と子どもの発達について	保育士	13 人
3	10 月 1 日(土) 10:30~12:00	専門看護師外来立ち上げ後 1 年の振り返り	小児看護 専門看護師	13 人
4	11 月 10 日(木) 18:30~20:00	2 組の特別養子縁組にかかわって	小児救急看護 認定看護師	14 人
5	12 月 3 日(土) 10:30~12:00	「実践事例からの家族・親・子ども理解」 ～世代間伝達とジェノグラムへの理解を深める～	臨床心理士	8 人

4. 評価と今後の課題

今年度の事例検討会は、事例提供者として小児看護専門看護師、小児救急認定看護師に加え、保育士、臨床心理士に依頼し、多職種による事例検討を行った。事例も多種多様であり、様々な視点からの検討ができ、子どもと家族へのかかわり方を考える充実した時間が持てた。

参加者からは、今後の支援に関する新たな視点を得られたという意見が多く聴かれ、各自の活動に役立てることができる示唆を得ていたことが伺えた。

次年度も子どもと家族を支援している医療職以外の専門職との事例検討も行き、子育て支援・虐待予防にかかわる支援者の、多角的な見方をはじめとしたスキルアップを目指していく。

1-2-4 高齢者ケア・研究事例検討会

1. 事業の目的

県内の高齢者ケアの質を向上させるために、ケアの専門家としての実践能力を育成・向上する継続的な学習の場とする。また、実践と教育・研究の連携の場としての有用性をはかる。

2. 実施状況・実施内容

回	月 日	テーマ	参加人数
109	平成 28 年 5 月 11 日 (水)	「大腿骨頸部骨折術後に入院してきた易転倒性のある認知症高齢者の看護」	10 名
110	7 月 13 日 (水)	「帰宅要求のある認知症高齢者に対する看護」 ミニレクチャー；「摂食嚥下のメカニズムと加齢による変化」	16 名
111	9 月 14 日 (水)	「訴えの多い左麻痺患者の対応・ケアに家族とケアスタッフが困っている事例」 ミニレクチャー；「認知症サポートプロジェクトチームの取り組みと課題」	16 名
112	平成 29 年 2 月 8 日 (水)	「社会性が乏しく向上心が低い患者を学生が担当し、どのような方向性を立てればよいか難しさを感じた事例」 ミニレクチャー；「当院におけるせん妄の取り組み：DELTAプログラム」	15 名
113	3 月 8 日 (水)	「BPSD（行動・心理症状）を伴う認知症高齢女性への看護の振り返り」 ミニレクチャー；「パーキンソン病と進行性核上性麻痺の豆知識～当院における認知症ケアの取り組み～」	13 名

- ・参加者：医療従事者対象（石川県内の高齢者ケアに関わる看護師（専門看護師・認定看護師）、本学大学院修了生、大学院生、在学生、老年看護学教員、施設管理者）
- ・個人のプライバシーを侵害しない
- ・個人の責任において資料を安全に保管する。不要になった時は、シュレッダー処理する。
- ・資料を他に活用する場合は、事例提供者の了解を得る。
- ・資料に関しては、個人が倫理的な責任を負う。

3. 評価と今後の課題

今年度は、認知症加算が病棟でも開始され、高齢者看護への関心が高まる傾向にあり、老人看護専門看護師や認知症看護認定看護師による介入の需要も高まってきている。この検討会では、専門看護師や認定看護師、本学の修了生がディスカッションに入ることで、疾患だけでなくその方の生き方や価値観の重要視すること、個別性の大切さを改めて考える機会となり、より高度な看護の実践に導くことができていると考える。また、第 112 回では、学部生の実習施設の事例を教員が提供したことで、実習施設スタッフと考えを共有する機会とすることもできた。今後も継続していく。

[参加者の評価（アンケートより一部抜粋）]

- ・振り返ることで、自分の思考を言語化できる。
- ・後々になって、その後の事例に関わったときに役立っている。
- ・一つの事例で、別の施設スタッフから多様な意見を聞くことは、大変参考になります。
- ・ミニレクチャーでは、新たな学びも得ることができてとても良かった。
- ・ミニレクチャーは、ポイントが絞ってあってわかりやすい内容だった。

1-2-5 がん看護事例検討会

1. 事業の目的

がん看護の質の向上を図るため、がん看護専門看護師と共に、日々のがん患者様やそのご家族への看護実践の中で遭遇する困難事例について、施設の垣根を越えて意見交換を行うことを通して、北陸3県のがん看護の質の向上を図るケアの専門家としての実践力を育英・向上する場とする。

資料の取り扱いについて

- * 事例検討会中の撮影・録音は行わない。
- * 参加者は、話し合われた内容について不用意に他言せず、施設や個人の情報を保護する。
- * 日本看護協会の倫理綱領の基本姿勢を遵守する。

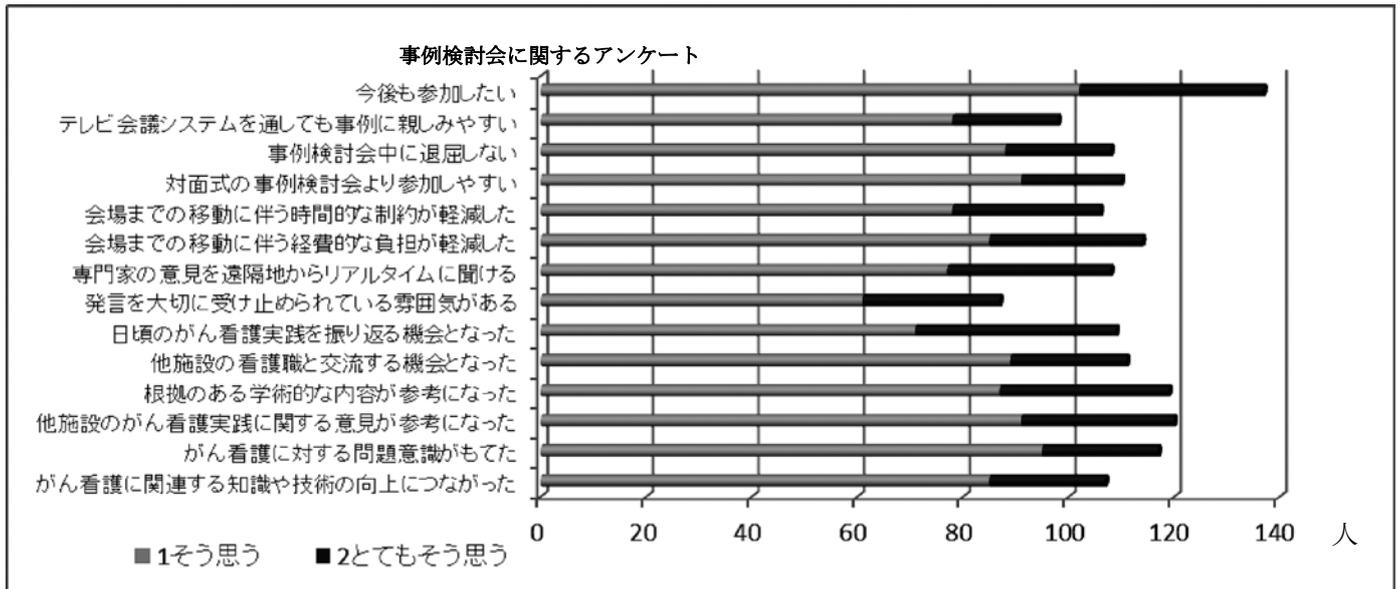
2. 実施状況

平成28年度は5月から計8回実施し、参加者数は674名であった。

回	月 日	テーマ	参加施設	参加人数
第1回	28.5.10(火)	分子標的薬による皮膚障害への外来化学療法室での取り組み	11施設	154名
第2回	28.6.7(火)	がんの診断と終末期を同時に告知された、本人・家族への看取りへの支援	11施設	108名
第3回	28.7.5(火)	終末期患者の日々の生活の中にある希望に寄り添った看護介入	11施設	101名
第4回	28.10.4(火)	終末期にある大腸がん患者と家族への関わり	11施設	93名
第5回	28.11.8(火)	終末期の腹水による苦痛緩和目的で転院した壮年期大腸がん患者の看護	9施設	34名
第6回	28.12.6(火)	壮年期にあるがん患者の精神的ケア	10施設	45名
第7回	29.2.7(火)	緊急入院となった患者への意思決定支援を考える	11施設	78名
第8回	29.3.7(火)	スピリチュアルペインを抱えた患者へのシームレスな療養支援～ケアの継続性の視点から～	11施設	61名

参加施設：(5大学+15病院) 金沢大学・富山大学・福井大学・金沢医科大学・石川県立看護大学・石川県済生会金沢病院・金沢赤十字病院・金沢市立病院・金沢医療センター・恵寿総合病院・小松市民病院・公立能登総合病院・富山県立中央病院・富山市民病院・富山赤十字病院・市立砺波総合病院・高岡市民病院・済生会富山病院・済生会高岡病院・福井県済生会病院

3. 事例検討会参加者の評価（アンケートより一部抜粋）



4. 事例検討会の成果

がん看護事例検討会は北陸 3 県 の 20 施設をテレビ会議で繋ぎ、遠隔地からも参加できることが大きな特徴である。内容は「がん看護事例検討会」(60 分) とがん看護専門看護師による「ミニレクチャー」(20 分) で成り立ち、教員や大学院生、がん看護専門看護師が参加し、意見交換されている。今年度は、5 月の開催では、抗がん剤による曝露対策として同志社女子大学薬学部の中西弘和教授に、「みんなで行こう抗がん剤曝露対策」のミニレクチャーをお願いした。北陸の冬は寒く、当日仕事終わりではなかなか集積できない 154 名が参加し、意義ある時間を過ごすことができたと思う。

今後も、地域の看護師や医療従事者のために、テレビ会議システムによる事例検討会を開催し、仕事終わりでも、自身の施設や近隣尾施設に立ち寄り学習ができる環境の整備をしていきたい。

1-3 相談サービス事業

1-3-1 各種研修会等への講師派遣事業

分野別派遣回数

番号	1	2	3	4	5	6	
種類	病院等	職能団体(看護協会等)	行政	学校・教育機関	福祉・高齢者関係の任意団体	その他	計
回数	36	1	7	0	1	1	46

No.	派遣講師	派遣日時	派遣場所	内容	主催者	種類
1	教授 西村 真実子	H28.6.25 13:30 ~ 15:30	石川県健康福祉部	児童福祉司養成研修講師	石川県健康福祉部	3
2	准教授 谷本 千恵	H28.6.25 14:00 ~ 15:30	看護実践学会	学会抄録の書き方についての講演	看護実践学会	2
3	講師 林 静子	H28.7.6 17:30 ~ 19:30	独立行政法人国立病院機構金沢医療センター	看護研究の指導	独立行政法人国立病院機構金沢医療センター	1
		H28.7.8 17:30 ~ 19:30				1
		H28.7.15 17:30 ~ 19:30				1
4	准教授 木森 佳子 助教 松本 智里	H28.6.24 13:30 ~	公立能登総合病院	看護研究の指導・講評等	公立能登総合病院	1
		H29.1.21 8:30 ~ 12:30				1
5	准教授 谷本 千恵 講師 川村 みどり 助教 大江 真吾 助教 清水 暢子	H28.6.1 ~ H29.3.31	石川県立高松病院	看護研究の指導	石川県立高松病院	1
						1
						1
						1
6	講師 川村 みどり	H28.6.23 16:00 ~ 17:00 H28.12.1 16:00 ~ 17:00 H29.2.中旬 17:30 ~ 19:00	公立宇出津総合病院	研修会講師	公立宇出津総合病院	1
						1
						1
						1
7	教授 西村 真実子	H28.7.30 14:00 ~ 15:00	しいのき迎賓館	学都石川の才知「母子関係の難しさ等から考える子育て支援」	大学コンソーシアム石川	6
8	准教授 中田 弘子	H28.7.3 16:30 ~ 20:00	公立羽咋病院	事例検討会講師	公立羽咋病院	1
9	教授 長谷川 昇	H28.6.18 8:30 ~ 12:00	宝達志水町民センター	骨密度測定、判定と判断	宝達志水町	3
10	助教 清水 暢子	H28.6.29 10:00 ~ 11:00	石川県立看護大学体育館	健康づくりと認知症予防の講演と運動	宝達志水町	3
11	准教授 中田 弘子	H28.8.24 13:00 ~ 15:00	恵寿金沢病院	研修会講師	恵寿金沢病院	1
12	教授 西村 真実子	H28.8.2 9:30 ~ 12:30	石川県立看護大学体育館	健康づくりと認知症予防の講演と運動	宝達志水町	3
		H28.8.6 9:30 ~ 12:30				3

No.	派遣講師	派遣日時	派遣場所	内容	主催者	種類
13	助教 曾根 志穂	2016/6/ 17:30 ~ 18:30	国民健康保険 志雄病院	看護研究の講義	国民健康保険 志雄病院	1
		2016/7/ 17:30 ~ 18:30				1
		2016/8/ 17:30 ~ 18:30				1
		2016/9/ 17:30 ~ 18:30				1
14	教授 村井 嘉子	H28.7.2 10:00 ~ 12:00	能美市立病院	看護研究の指導・講評	能美市立病院	1
		H28.10.上旬 10:00 ~ 12:00				1
		H29.1.下旬 10:00 ~ 12:00				1
		10:00 ~ 12:00				1
15	教授 川島 和代	H28.6.22 16:00 ~ 17:30	恵寿金沢病院	研修会講師	恵寿金沢病院	1
16	講師 曾山 小織	H28.5.15 10:00 ~ 12:00	珠洲市総合病院	看護研究指導・講評	珠洲市総合病院	1
		H28.10.23 10:00 ~ 12:00				1
		H29.3.5 10:00 ~ 12:00				1
		10:00 ~ 12:00				1
17	講師 金谷 雅代	H28.5.21 9:00 ~ 12:30	医療法人社団浅ノ川 浅ノ川総合病院	看護研究指導・講評	医療法人社団浅ノ川 浅ノ川総合病院	1
		H28.6.25 9:00 ~ 12:30				1
		H28.9.17 9:00 ~ 12:30				1
		H28.11.26 13:00 ~ 16:30				1
		13:00 ~ 16:30				1
18	助教 田村 幸恵	H28.4.1 ～ H29.3.31	独立行政法人地域医療機 能推進機構 金沢病院	看護研究指導・講評	独立行政法人地域医療 機能推進機構 金沢病 院	1
19	教授 川島 和代	H28.9.3 9:00 ~ 11:00	独立行政法人地域医療機 能推進機構 金沢病院	クリニカルリーダー研修講師	独立行政法人地域医療 機能推進機構 金沢病 院	1
20	准教授 垣花 渉	H28.12.11 9:30 ~ 15:40	石川県スポーツ推進委員 協議会	研修会講師	石川県スポーツ推進委 員協議会	3
21	講師 林 静子	H28.10.14 17:30 ~ 19:30	独立行政法人国立病院機 構金沢医療センター	看護研究の指導	独立行政法人国立病院 機構金沢医療センター	1
		H28.10.17 17:30 ~ 19:30				1
		H28.10.18 17:30 ~ 19:30				1
		17:30 ~ 19:30				1
22	准教授 中田 弘子	H28.11.24 14:00 ~ 14:40	石川県立中央病院	研修会講師	石川県立中央病院	1
23	准教授 桜井 志保美	H28.12.15 13:30 ~ 15:00	かほく市役所	在宅介護者教室講師	かほく市	3
24	准教授 中田 弘子	H28.12.6 17:30 ~ 18:30	国民健康保険 志雄病院	研修会講師	国民健康保険 志雄病院	1
25	講師 川村 みどり	H28.11.5 10:00 ~ 12:00	社会福祉法人 なごみの郷	家族交流会講師	社会福祉法人 なごみの郷	5

1-3-2 病院への事例・看護活動・研究等の指導助言実施状況(再掲)

地区別	派遣病院名	指導内容	講師名		回数
加賀地区	能美市立病院	研修会講師	教授	村井 嘉子	3
金沢地区	医療法人社団浅ノ川 浅ノ川総合病院	看護研究指導・講評	講師	金谷 雅代	4
	恵寿金沢病院	研修会講師	教授 准教授	川島 和代 中田 弘子	1 1
	独立行政法人地域医療機能 推進機構 金沢病院	研修会講師 看護研究指導	教授 助教	川島 和代 田村 幸恵	1 1
	独立行政法人国立病院機構 金沢医療センター	看護研究指導	講師	林 静子	6
	石川県立中央病院	研修会講師	准教授	中田 弘子	1
能登地区	珠洲市総合病院	看護研究指導	助教	曾山 小織	3
	国民健康保険 志雄病院	看護研究指導	准教授 助教	中田 弘子 曾根 志穂	1 4
	公立能登総合病院	看護研究指導	講師 助教	木森 佳子 松本 智里	1 1
	公立宇出津総合病院	看護研究指導	講師	川村 みどり	3
	公立羽咋病院	事例検討会	講師	中田 弘子	1
	石川県立高松病院	看護研究指導	准教授 講師 助教 助教	谷本 千恵 川村 みどり 大江 真吾 清水 暢子	4

2 地域連携・貢献事業

2-1 地域連携事業

2-1-1 来人喜人（きときと）里創りプロジェクト事業

1. 事業の目的

能登町は産業基盤が脆弱であり、かつ就学、就職時に若者が町外に流出し、少子高齢化、過疎化が急激に進行している。2010年度の高齢化率は能登町の40.1%、2035年度予測は52.6%であり、生産年齢人口が高齢者人口を大幅に下回りつつある。それに伴って、地域住民の健康な生活を支えていた地域のシステム、伝統文化、コミュニティの絆、地域産業などが減退しつつある。そうした現状を踏まえると、能登町の最大の課題は少子高齢化と高齢者等の医療、介護である。その補完的な解決策として交流人口の拡大と健康に関わる社会的文化的な活動の強化が考えられる。本プロジェクトでは看護大学の特色を踏まえ、健康問題、特に健診率向上キャンペーンを展開すると同時に、運動と食事生活に関わる文化、社会活動において地域で活動する諸団体と連携、交流しながら住民の健康づくりをサポートする。

2. 実施状況

平成28年

4月～12月 ロコモティブシンドローム予防事業

5月10日 「第29回猿鬼歩こう走ろう健康大会」に参加。健康キャンペーン実施。

10月24日～25日 石川県立看護大学学園祭にて「クライネメッセ」の開催。

3. 実施内容

- ・能登町健康福祉課、健康大会事務局、能登高校地域創造学科、能登町社会福祉協議会など能登町の連携団体と協力しながらその活動を支援することができた。
- ・歩こう走ろう健康大会では、大学か学生、教職員の参加、さらに大学近辺のかほく市からの参加者も同行し、地域間交流ができた。
- ・大会での健康キャンペーンでは、学生も健康チェックに参加し、大会参加者や地元住民との交流ができた。
- ・大会に健康キャンペーンを継続して参加してきた結果、健康チェックの参加者が年々増加している。
- ・大学祭でのクライネメッセでは、ジェラード、能登野菜、能登牛丼の販売を通じた能登地区の紹介を行い、地域住民との交流ができた。また、能登高校の出店で、充実した能登のPR活動ができた。
- ・能登町と看護大学が連携して住民の健康を支援するネットワーク基盤ができた。
- ・看護大学の学生、教職員の能登への関心が高まった。

4. 評価と今後の課題

- ・引続き住民の健康づくりに意義がある事業をこれまで培ってきた連携のネットワークを活用して実施する。
- ・本事業とそこで育んできた枠組みを基盤として、本学が一つの目標とする「地域の健康づくりにアプローチできるグローバルな視野を持った人材を育成」（ヒューマンヘルスケア人材育成プロジェクト）に展開、発展させたい。

2-1-2 健康応援倶楽部・健康推進モデル事業

1. 事業の目的

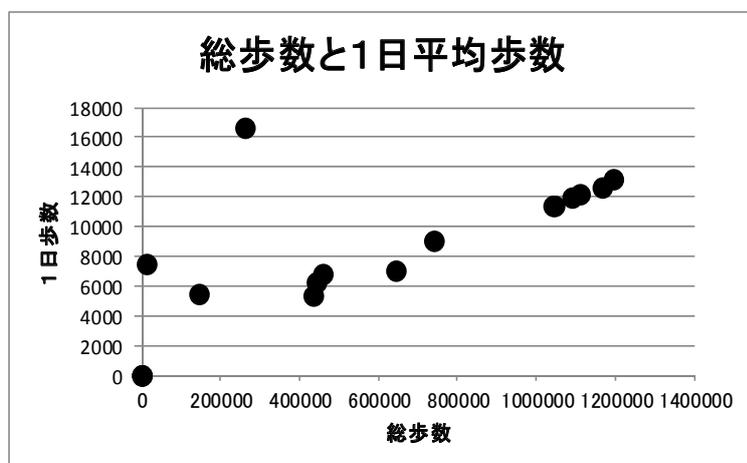
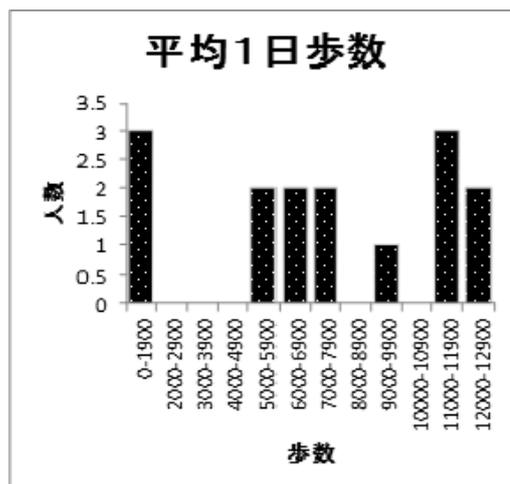
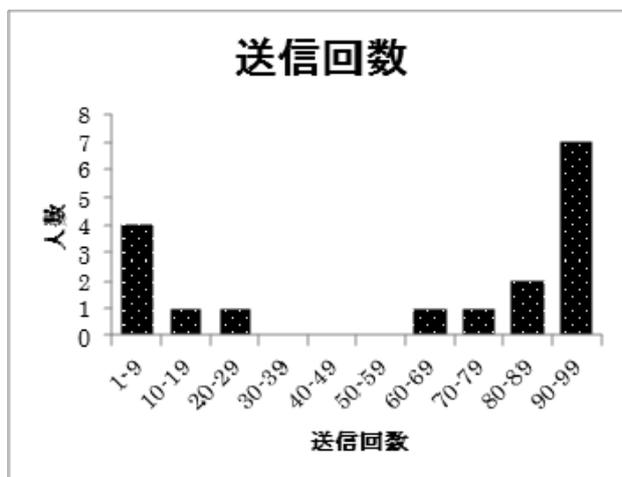
PCや携帯電話があれば、好きな時間に好きな場所からインターネットを經由して身体状態を入力できるシステム「毎日健康倶楽部」を構築している。このシステムによって、体組成、身体活動量、食事量を一元的に把握し、週単位での運動処方や食事指導などを継続的に行い、対象者が身体状況を入力してから、評価・アドバイスまでを短期間でフィードバックする双方向コミュニケーションが可能となっている。

本年度は、かほく市との包括協定に基づく、健康福祉課と垣花准教授担当の共同事業、「歩くスモールチェンジ」健康づくり事業のなかで、日々の運動を継続する手段として「毎日健康倶楽部」の利用を促した。

2. 実施状況

平成28年6月～平成28年9月 登録者17人

3. 実施成果



- ・送信回数 (93日間): 最高93回、最低2回 (平均58回)
- ・1日の歩数: 平均9,715歩 (送信回数0回3人を除く)

「毎日健康倶楽部」の利用者は、3ヶ月の間、毎日、ほぼ10000歩を歩くことが出来た。

4. 評価と今後の課題

平成29年度の健康応援倶楽部・健康推進モデル事業は、引き続き、かほく市民の健康増進事業として展開していく予定である。

2-1-3 「歩くスモールチェンジ」健康づくり

1. 事業の目的

「健康日本21」（第一次）では、健康づくりに関する知識や意欲は上がったが、それを行動に反映させることは難しいという課題が浮上した。そのため、このような課題を解決する健康づくりの実践方法を、住民へ広く普及させることが重要である。

かほく市では、昨年度より看護大学と連携して、歩くことを意識した生活を送る健康づくりプログラムを行っている。その結果、参加者は自分の生活リズムにあわせて、歩数計を使いながら歩くことを習慣にして健康づくりを楽しんだことが明らかになった。

そこで、今年度は、健康づくりの実践の「敷居」を低くさせ、その開始を容易にする健康行動（「歩くスモールチェンジ」行動）を参考に、健康づくりの普及・促進を図る。

2. 実施状況

- ・参加者は歩数計を用いて歩くことを意識した生活を3ヶ月実施
- ・健康づくりの事前・事後で形態・体力の測定
- ・歩く量を個人ごとに設定して実現を目指す目標設定
- ・毎日の体重と歩数を記録する用紙を使った自己観察
- ・個人の健康づくり活動を報告する意見交換
- ・努力に対する報酬

3. 実施内容

- ・5月と9月に、それぞれ形態と体力を測定した。
- ・45名の参加者数は、6月1日から8月31日までの3ヶ月間に健康づくりを実践した。
- ・参加者の健康づくりの動機付けを促すため、期間中に2回のウォーキングイベントを行った。
- ・参加者にとっては、健康づくりの知識とともに活動を続けるための要点を習得できる機会となった。

4. 評価と今後の課題

事業規模の拡大を図るとともに、健康づくりの科学的効果を裏付けるための研究的な取組へ発展させることを計画している。

2-1-4 棚田が織りなす食・緑・健康の郷づくり

1. 事業の目的

津幡町興津地区が有する社会資源である「食」・「緑」・「健康」を有効に活用することで都市と田舎の異世代・異業種との交流の促進を図ること。併せて、地域の人材育成を進め、異世代・異業種の団体と連携しながら持続可能な地域をつくること。

2. 実施状況

平成 25 年からの継続

- ・興津を元気にする協議会」を継続して運営し、住民約 20 名および学生 10 名は年に 4~5 回の頻度で地域づくり活動を実施した。

平成 28 年度

- ・住民の形態・体力測定（5 月）
- ・「興味津々」かぼちやの芽付け作業（5 月）
- ・民泊体験会（6 月）
- ・秋のしあわせ感謝祭（10 月）

3. 実施内容

- ・形態・体力測定では、住民 20 名が身長・体重・体脂肪量・筋肉量の測定、及び握力、長座体前屈、立位姿勢の重心動揺、ファンクショナル・リーチテストを行った。
- ・かぼちやの芽付け作業では、住民リーダーの指導のもと、容器に入った土の中に種を 2cm ほどかぶせることを行った。
- ・民泊体験会では、23 名の学生が 5 戸に分かれて民泊を体験し、中山間地の風土や自然を学ぶことができた。
- ・秋のしあわせ感謝祭では、住民が準備や当日の運営に関わり、学生は住民と連携して祭りを円滑に薦める支援を行った。

4. 今後の取組予定：

住民と学生の交流イベントを通じて、高齢農家のやる気・元気・活気の創出につなげるとともに、「彼岸花オーナー制度」を継続することを計画している。一方で、夏から秋にかけての天候不順に伴う農作業の延期により、交流活動の縮小が起こっている。

2-1-5 いきいき美人大学校

1. 事業の目的

かほく市では、「健康クラブ」と称する高齢者による健康の維持・増進を目指した自主的なグループ活動が行われている。活動の内容は、リズム体操、ストレッチ体操、ダンスなどであり、講師の指導のもと1時間ほどの活動を行っている。参加者の目的は、踊りをうまくなりたい、孫と一緒に遊べる体力を保ちたい、奉仕活動を続けられるように元気でいたい等さまざま、好奇心や関心に基づく内発的動機づけを持ちながら楽しく活動している。

このような内発的動機づけに基づく健康意欲を後押しすることを目的に、「健康クラブ」に参加する高齢者を対象に、楽しみながら自分の健康状態を知ることができる生涯学習の場を提供することを目的とする。

2. 実施状況

平成19年からの継続

- ・地元の総合型地域スポーツクラブと連携して、かほく市内の「健康クラブ」に通う高齢者をバスで看護大学へ送迎する。約2時間の健康教室を、看護大生が中心に開催する。

平成28年度

- ・大学にある健康測定機器を使った形態・体力の測定
- ・レクリエーションゲームによる身体と頭を使う体操
- ・工作の共同作業を通じた交流
- ・健康教材の使い方のデモンストレーションやロールプレイ等を取り入れた健康知識の理解

3. 実施内容

- ・夏と春にそれぞれ4回ずつ健康教室を開催した。
- ・夏の開催日と参加者数は、8月25日が14名、8月26日が21名、9月2日が21名、9月30日が11名であった。合計67名の参加数であった。
- ・春の開催日と参加者数は、3月3日が33名、3月16日が11名、3月17日が26名、3月31日が11名であった。
- ・住民にとっては、日ごろの健康づくりの成果を確認できる機会となった。若者との交流を通して、心のリラクゼーションを図る機会ともなった。
- ・学生にとっては、地域住民の健康の維持・増進という社会貢献を果たすとともに、コミュニケーション能力を磨く機会となった。

4. 評価と今後の課題

引続き継続して開催できるよう、学生は事前学習でイベントの内容を十分に吟味し、それを運営会議で諮る。かかわる全員の学生で知恵を出し合いながら、参加者が満足するような活動になるよう試行錯誤を重ねて健康教室の開催プランを立案する。

2-1-6 モールウォーキング事業

1. 実施目的

モールウォーキング事業は、冬場の運動不足の解消を目的とした「か歩く健康ウォーキング」事業に、かほく市およびイオンモールかほくと連携して取り組み、参加住民の健康チェックとモールレッスンにおけるミニ講話等を行うことを目的としている。

2. 実施状況

○歩数計活用型健康ウォーキングの事前健康チェック

9/26（月）～9/30（金）かほく市ほのぼの健康館

○か歩く健康ウォーキング事業開会式および健康チェック

開会式 10/1（土）10時～11時 イオンモールかほく センターコート

健康チェック 10/1（土）13時～15時半 イオンモールかほくグリーンコート

○モールレッスン

第2回 11/15（火）「血管を守ろう！（高血圧編：高血圧と食塩の関係）」

第3回 12/7（水）「血管を守ろう！（血管年齢編）あなたの血管は大丈夫？」

○か歩く健康ウォーキング事業閉会式

閉会式 3/11（土）10時半～12時 イオンモールかほくセンターコート

○歩数計活用型健康ウォーキングの事後健康チェック

3/13（月）～3/15（水）かほく市ほのぼの健康館

3. 実施内容

歩数計活用型健康ウォーキングの登録者248名に対して事前の健康チェックを教員のべ35名と学生のべ10名で実施した。事後の健康チェックは教員のべ27名と学生のべ6名で実施した。

開会式後の健康チェックでは150名ほどの住民に血圧、握力、開眼片足立ちの測定と立位バランスを教員7名、学生7名で行った。

モールレッスン第2回および第3回ではそれぞれ80名ほどの参加者があり、教員3名で対応した。

いずれの回も多くの参加者があり、かほく市民の健康への意識の高さが伺われた。

4. 評価と今後の課題

非常にたくさんの参加者がありいずれのイベントも盛況であった。本事業は教員9名が担当した。今後は健康づくりに関する最新研究動向を踏まえながら、今回のデータを分析し、どのような方への効果が大きかったのかを整理し、学会発表や論文投稿へと結びつけていく必要がある。

2-2-1 子育て支援学生ボランティア事業

1. 事業の目的

かほく市子育て支援課との連携の下、子育てしやすい街づくりを目指し、かほく市こども総合センターを活動拠点に、本学学生によるボランティア活動を平成 27 年度から実施することになった。本学の学生がこども総合センターの利用者に対して子育てに関する看護大学生ならではのお手伝いができ、また、活動を通して、こどもの発達を学べる場となり、かほく市と本学の双方にメリットがある事業として継続的に行う。

2. 実施状況

今年度は、かほく市子育て支援課と本学地域ケア総合センター地域活動部会及びボランティア希望学生と合同会議を重ね、学生ボランティア活動開始に向けて準備を進めた。

(1) 会議等

①かほく市・地域活動部会合同会議

4/15 (かほく市 3 名、本学教員 4 名参加)

8/18 (かほく市 3 名、本学教員 6 名参加)

②かほく市・地域活動部会・学生合同ミーティング

9/8 (かほく市 6 名、本学教員 2 名、学生 5 名参加)、

11/30 (かほく市 3 名、本学教員 4 名、学生 5 名参加)

③地域活動部会教員・学生とのミーティング

9/15 (本学教員 2 名、学生 19 名参加)

3/7 (本学教員 3 名、学生 3 名参加)

(2) ボランティア活動

①9/15 (乳幼児わくわく運動会：学生 19 名、本学教員 2 名参加)

②2/25～3 月末 (かほく市こども総合センターのイベントでの託児ボランティア等：学生 3 名参加)

3. 実施内容

- ・ 9/15 のわくわく運動会に参加した学生の意識調査では、都合が合えば、ボランティアへ参加したいという全員の希望があった。
- ・ 11/30 のかほく市・地域活動部会・学生合同ミーティングに参加した 5 名 (1 年生) の学生を中心に、今年度は託児ボランティアなど、まず自分達にできる活動から開始した。

4. 評価と今後の課題

- ・ 土曜日もしくは平日の参加可能日に、かほく市こども総合センター利用者の乳幼児の託児ボランティアを通して、対象者の特性や興味などを把握し、年長児や母親への健康教育 (紙芝居、ペープサート等) など学生が興味を持って継続的にできることを企画する。
- ・ 2 年次、3 年次学生にもボランティア活動への参加を呼びかける。
- ・ 今後、子育て支援ボランティアサークル (仮名) として立ち上げることを目標とする。

2-2-2 被災地ボランティア活動

1. 事業の目的

東日本大震災で被災された多くの住民が仮設住宅から災害公営住宅へとその生活基盤を変えようとしているのが現状である。しかしその地での新しい絆づくりという新たな課題が今まさに生じている。本事業の目的は、被災地の社会福祉協議会と連携して、その絆づくりに学生のボランティア活動を役立てようとするものである。

2. 実施状況

日 時：平成 29 年 3 月 22 日（水）～24 日（金）

場 所：宮城県亶理郡亶理町

内 容：3 月 23 日（木）10～12 時

浜吉田北区集会所

・ハガキ及び名刺作り手伝い、個別訪問

3 月 23 日（木）14～16 時

西木倉災害公営住宅集会所

・カレンダー作り、イキイキ百歳体操、個別訪問

参加人数：学生 35 名、教員 3 名



3. 実施内容

亶理町の浜吉田北区集会所では 25 名の住民の参加があった。民生委員の方のハガキと名刺づくりをお手伝いする形での活動だったが、事前にご案内のハガキを郵送したため、それを持参してくださる方が多く楽しい一時となった。午後からは西木倉災害公営住宅集会所で 20 名の住民の参加があった。遠方からわざわざ駆けつけていただき久しぶりにお会いできた方や昨年の活動で作ったティッシュケースを持参してくださった方もあり、今までの活動の成果を実感できた嬉しい時間であった。

また平成 27 年度に引き続き生活支援相談員の方と一緒に個別訪問させていただいた学生も一部あり、災害公営住宅のお部屋ではさまざまなお話を伺うことができた。

最終日は「震災語り部の会ワッター」のお二人に荒浜地区の案内をお願いし、震災当時のお話をお聞きすることができた。

今年もたくさんの心温まる出会いがあり、被災地に出かけていくことでしか感じることでできない大切なものがあることを実感できた。ひと言添えて出した年賀状を大切に持参してくれたおばあちゃんに「次はもっと心を込めて」と多くの学生が感じた。「亶理町の人々とのつながり」を感じることができた貴重な機会であった。

4. 評価と今後の課題

被災地の災害公営住宅に転入した方の孤立化防止を目的とした今回の被災地ボランティア活動は、亶理町社会福祉協議会担当者や民生委員の方々のご協力もあり大変盛況であった。ただ災害公営住宅ならではの「寂しさ」を訴える方もあり、被災地に新たな絆づくりのきっかけとしてのボランティア活動の重要性を改めて感じる機会となった。被災地で学んだことを地元に戻元していくことを視野に入れながら活動を継続していきたい。

2-2-3 限界集落における閉じこもり予防活動

1. 事業の目的

この活動は、中山間地域という立地や高齢化の進行等の背景から、不足しがちな支援の一端を担い、限界集落における高齢者の健康増進に寄与し、閉じこもり予防のための健康支援を目的に実施した。

2. 実施状況

対象：宝達志水町の走入、見砂、清水原地区に居住する高齢者等

場所：走入地区集会所

講師：織田初江（石川県立看護大学 地域看護学 准教授）

山崎智可（石川県立看護大学 在宅看護学 助教）

金子紀子（石川県立看護大学 地域看護学 助教）

協力：原文香（宝達志水町 国民健康保険 志雄病院 理学療法士、第1、3、4回目）

松江好恵（宝達志水町 国民健康保険 志雄病院 理学療法士、第1、3、4回目）

舟田真美（宝達志水町 国民健康保険 志雄病院 保健師、第1～3回目）

藤井弥生（元宝達志水町子ども家庭室長(保健師)）

学生ボランティア（石川県立看護大学 Team まめ宝）

表1. 開催日時・内容・参加人数・協力者、等

回数	年月日	時間	内容	担当者	参加人数
第1回	H28. 10.9(日)	14:00～ 16:30	①受付・健康相談、アンケート記入 ②自己紹介と近況紹介、歓談 ③身体機能測定 ④PTさんの講義・個別相談「転倒予防」 ⑤レクリエーション ⑥話し合い「次回したいこと」	舟田、藤井 学生、教員、PT 進行；織田 原、松江、全員 原 山崎 司会；織田	12名
第2回	H28. 11.13(日)	13:30～ 16:00	①受付・健康相談 ②自己紹介と近況紹介、歓談 ③認知症予防の話 ④コグニサイズ・ティータイム ⑤レクリエーション ⑥話し合い（次回計画）	学生、教員、 舟田、藤井 進行；織田 織田 学生 山崎 司会；織田	8名
第3回	H29. 1.29(日)	13:30～ 16:00	①受付・健康相談、理学療法士による相談 ②自己紹介と近況紹介、歓談	学生、教員、舟田、 藤井、原、松江	9名

回			③PTさんの講義「安全な運動のための注意点」 ④コグニサイズ・ティータイム ⑤レクリエーション ⑥話し合い（次回計画）	進行；織田 原、松江 学生 山崎 司会；織田	
第4回	H29. 3.5(日)	13:00～ 16:30	①受付・健康相談 (PTさんの状況確認・指導を含む)、 ②準備運動・身体機能測定 ③自己紹介・近況報告、 身体機能測定の感想、歓談 ④コグニサイズ ⑤レクリエーション ⑥10月と3月の成果表を見ながら話し合い (今後について)	学生、教員、藤井、 原、松江 原、松江、全員 進行；山崎 学生 山崎 説明・進行；織田 コメント；原、松 江	10名
合 計					39名

参加延べ人数は39名、実人数は14名である。また、第1回目、第4回目の身体機能測定を両方とも実施した者は8名であった。参加者の平均年齢は、69.86歳（40代2名を含む）、男性7名、女性7名である。

3. 実施内容

※各回の実施内容および担当者は、表1に示した。

(1) 身体機能測定の項目

- ① 握力（筋力の評価）
- ② 開眼片足立ち（バランス能力の評価）
- ③ 5m歩行、5m最大歩行（歩行能力の評価）
- ④ Timed up & go（複合的な動作能力の評価）

(2) アンケート内容

- ① 運動に関する調査（整形外科的側面を含む）
- ② 基本チェックリストによる生活・行動・健康面等のチェック

(3) 健康相談

- ① 血圧測定・脈拍測定
- ② 健康状態や気がかり等の相談

4. 評価と今後の課題

(1) 身体機能測定値から見た活動の評価と課題

本事業は、事業の目的を踏まえて、降雪等の影響により生活上の行動制限を受けやすい、冬期期間を挟んで実施した。初回および最終回の2回の身体機能測定を実施した8名（平均年齢

75.5 歳、男性 4 名、女性 4 名) の前後の測定結果を比較すると、握力 (右) +0.66 (左) +0.65、開眼片足立ち (右) +0.27 (左) -6.05 であった。開眼片足立ちの左足での測定結果が、悪化しているのは、この間に膝の変形を指摘されたなどの理由によるものと考えられた。また、5 m 最大歩行結果では 0.00 と 2 回の間に変化はなかった。さらに、複合的な動作能力の指標である Time up & go では-7.85 秒と複合的動作能力の改善をうかがわせた。

(2) 参加者の発言に見る活動の評価と今後の方針

今回の結果は、冬期間を挟んだ 5 か月という短期間の変化であり、その間に膝や腰の状態に課題を抱えた者も含む集団的な分析によるものであるが、多くの項目で能力水準の維持・向上と思われる結果が得られたことは、本事業の成果がその一端を担ったと考えられる。ただし、今回の結果は対象者数が少なく、また、対照集団を設定もしていないため、統計的な有意差を確認するには至っていない。

さらに本事業について、参加者からは、「こうした機会は必要」、「日常的には自分たちで頑張るが、定期的にその成果を確認できるように支援をしてほしい」との希望が話された。このことから、日常的な実践の必要性とそれに対する意欲の醸成や、成果の科学的な確認および問題の把握が必要とする認識に対する本事業の影響の一端がうかがえた。

今後は、定期的 (概ね半年ごと) な身体機能測定による自助努力への評価と知識及び意欲への継続的な支援活動が必要と考える。

2-2-4 鳴子の音楽運動療法による元気いきいき教室（介護予防）

1. 事業の目的

このプログラムは、高齢者のための音楽療法、運動療法技術研修を修了した研究者らが考案したものである。なじみの音楽（演歌や歌謡曲）に合わせ、高知のよさこい祭りで知られる「鳴子」を鳴らしながら体操をするもので、無理なく楽しく、転倒予防や運動機能向上、さらに免疫力、認知機能の向上など効果が出ている。このプログラムについて、石川県内の介護予防教室参加者に体験してもらうことを目的に実施した。

2. 実施状況

対象：石川県内の高齢者サロンに通所する介護予防が必要な虚弱な高齢者 とその指導者

講師：精神看護学 助教 清水暢子

協力：NPO 法人 生涯体育学習振興機構 健康運動指導士 藤田有布子

表 1. 開催日時・主催・場所・参加人数について

回数	月日	時間	主催	場所	人数
第1回	H28. 6. 10（金）	10:00～ 12:00	羽咋市社会福祉協議会 老人福祉センター	羽咋市鶴田町亀田	25名
第2回	H28. 6. 10（金）	12:30～ 13:00	羽咋市在宅総合サービス ステーション (羽咋すこやかセンター内)	羽咋市鶴田町亀田	40名
第3回	H28. 6. 10（金）	14:00～ 15:30	宿泊型老人ディサービス NOA	石川県小松市八幡	20名
第4回	H28. 7. 20（水）	13:30～ 14:30	七尾市石崎福祉会館 石崎 地区高齢者サロン	七尾市石崎	28名
第5回	H28. 8. 3（水）	14:00～ 15:30	老人ホームディサービス Welina	石川県小松市八幡	25名
第6回	H28. 8. 23（火）	13:30～ 16:00	志賀町すみれ作業所	羽咋郡志賀町高浜町	23名
第7回	H28.10.11（月）	10:00～ 12:00	白山市 友愛の里 高齢者サロン 内容の紹介のみ (実施日が合わず)	白山市 友愛の里	
合 計					161名

3. 実施内容

(1) 認知機能と音楽運動療法の効果についてのミニレクチャー

高齢者を対象とした運動療法は、有酸素運動が脳の血流を増し、高血圧やコレステロールのレベルも下げるといった効果の報告もあり、それが認知症予防にも影響を与えている、ともいわれている。しかし、実際に運動習慣の少ない高齢者にとって、普通の歩行速度を超える運動強度を課すことは習慣化しにくく、認知症

予防に影響を与えるほどの運動量は確保できない。運動が苦手な高齢者にとって、運動介入による目眩やふらつき、疲労感などの負担感の方が大きくなる。

一方、運動習慣の少ない高齢者でもストレスが少なく運動継続できる方法として、従来から「動きを伴った音楽療法 ;Movement Music Therapy(MMT)」がある。音楽によるリズムパターンの反復や打楽器演奏による振動の共感性が、高齢者の自発性を引き出し、発話の促進や感情表出にも効果があるとされる。また、健康運動指導士の動きと音楽のリズムに合わせて鳴子を鳴らしながら身体を動かし、同時に曲に合わせて唄を唄うというデュアルタスク（二重課題）を課すことで脳の血流量の活性化にもつながることを教員の研究データを下に説明した。

(2) 鳴子の音楽運動療法に挑戦

鳴子の音楽運動療法を使用したデュアルタスクトレーニングに挑戦してもらった。最初は鳴子を鳴らしながら体を動かすことで精一杯だった参加者も最後には声を出して唄いながら実施することができた。初体験のデュアルタスクに参加者から「何回かやらないとダメだわ～」と脳への良い刺激となった様子であった。

また、第3回目と第5回目は、施設在住（要介護 2.5 平均）の高齢者が対象であった。鳴子を使ったことはほとんど無い様子であったが、なじみの演歌に大きな声を出して唄ったり、指導者の鳴子の動きに一生懸命手首を動かし、鳴子と体の動きに集中して取り組んでおられた。施設のスタッフからも「うち（事業所）にも鳴子はあるが、このような本格的な鳴子に触れたのは初めて出し、音の響きが違う。動き方がわかるともっと自分達でも指導が行えるのだが」と、実践内容の指導研修を望まれる声が聞かれた。

(3) 介護予防事業指導者への研修

第2回目のみ在宅サービス提供者である介護福祉士や訪問看護師を対象とした研修会を行った。研修内容は「介護予防：鳴子を使った音楽運動療法の実践」と題して、本学教員による音楽と鳴子によるデュアルタスクトレーニングの認知機能への効果についてミニレクチャーの後、さっそく実践指導となった。初めは、手足を刺激する軽体操から音楽のリズムに合わせて「グッチーパー」体操、「函館の女」「365歩のマーチ」の曲に合わせた鳴子の音楽運動療法を体験してもらった。参加者全員が汗だくになりながら声を出し、体を動かし鳴子を鳴らすというデュアルタスクトレーニングに励み、講師側からは「各地区の高齢者サロンに持ち帰り、介護予防に役立てて欲しい」と約45分の研修実施後にお願いした。

4. 評価と今後の課題

今回の実施目的であるプログラムの体験と効果の評価については、参加者からプログラム内容については好評であったものの、「一回では、足りない」「何回かやらないとダメだ」など、単発のプログラムに「もっと参加したい」との要望が多く聞かれた。また一緒に参加してもらった高齢者サロンの主催者側からは「うちにも鳴子はあるが、このような本格的な鳴子に触れたのも初めて出し、音の響きが違う。動き方がわかるともっと自分達でも行えるのだが」、「鳴子はあっても、どう使ってレクリエーションするのかわからない。」「指導のバリエーションがあるといいのだけど、一曲だけでは」と、こちらの運動指導者の動きに一生懸命習得しようとする様子が見られた。また今後、運動実践内容の指導研修を望まれる声が多く聞かれた。

来年度は是非、指導向けの研修を中心に行ったり、プログラムをDVD化し、多くの指導者に実施・普及できるような研修を企画できたらと思う。1回のみ、羽咋市在宅総合サービスステーション職員への鳴子の音楽運動療法技術講習を行ったが、約40名のスタッフの参加があった。

2-2-5 あかちゃんをお空へみ送った方の自助グループに対するサポート活動

1. 事業の目的

あかちゃんを亡くした方がアクセスしやすいような体制作りとお話会を開催しあかちゃんを亡くした方の自助グループ活動を支援する。

2. 目標

- (1) お話会の運営をサポートする。
- (2) 体験者、臨床、地域からの相談があった場合、4つの自助グループのネットワークを通じて対応できる。

3. 実施状況

・お話会開催 日時・場所

対象：あかちゃん（流産・死産・新生児死亡・乳児死亡等）であかちゃんを亡くした方

回数	月日	時間	主催	場所
第1回	H28. 4. 24（日）	13:30～16:00	ひまわりの会	石川県NPO活動支援センター「あいむ」
第2回	H28. 6. 6（月）	10:00～12:00	小さな天使のママの会	津幡町役場 庁議室
第3回	H28. 7. 24（日）	13:30～16:00	ひまわりの会	松任ふるさと館
第4回	H28. 10. 3（月）	10:00～13:00	小さな天使のママの会	津幡町役場 庁議室
第5回	H28. 10. 23（日）	13:30～16:00	ひまわりの会	津幡町「俱利伽羅塾」
第6回	H29. 1. 22（日）	13:30～16:00	ひまわりの会	石川県社会福祉会館
第7回	H29. 2. 6（月）	10:00～14:00	小さな天使のママの会	津幡町福祉センター

・適宜メール相談・電話相談・面談

・ひまわりの会 自殺予防活動

H29. 2. 18(土) 14:00～16:00 ころの健康づくり講演会 石川県・かけがえのない命をまもるネットワークいしかわ(ひまわりの会所属) 主催

・体験者の話を聞く場：

母性看護方法論の特別講義枠で自助グループ代表者・メンバーの方に語っていただく。

・窓 口：米田昌代(石川県立看護大学・天使のゆりかご)

自助グループ代表:安田文子(ひまわりの会) 丹保美枝(SIDS家族の会北陸支部) 村中智恵・泉早苗(小さな天使のママの会) 藤田美保(ハートシェアの会)

4. 実施内容

広報活動：

石川県ころの健康センターの冊子『相談対応のための手引き 自殺未遂者への支援の方法』に掲載していただいた。ちらしを希望施設に送付した。

お話会の開催：

ひまわりの会は3ヶ月に1回(1・4・7・10月の第4日曜日)、小さな天使のママの会は4ヶ月に1回(2・6・10月の第1月曜日) 予定通り開催した。

個別相談：

体験者からの問い合わせに応じ、適宜自助グループ、相談体制に対する情報提供を行った。メールでの個別相談は3件であり、そのうち1件は家庭訪問を実施し、継続フォロー中である。

自殺予防活動：

ひまわりの会の代表の方が石川県が主催する活動に参画しており、メンバーが企画に参加した。今後も県と民間団体が協力して実施する自殺予防活動に協力していく予定である。

家族同士の橋渡し：

体験者が自分に近い背景の方と話したいという希望があり、ミニお話を企画した。

5. 評価と今後の課題

広報活動：

いろいろな冊子に掲載していただくことで、活動を広めることができ、利用される方も増えると考えられる。今後も機会があれば関連の広報冊子に掲載していただくこととする。

ちらしについての問い合わせが多かった。各施設になくなってきていると考えられるため、来年度初めに各施設複数枚送付することとする。県立中央病院では、救急外来においてくださるということなり、会が認知されるようになってきたと考える。活用場所が広がることを期待する。

お話会の開催：

今年度は定例会のみの年7回の開催となった。SIDS 家族の会は、2013年より代表の都合で、お話し会開催が休止状態になっており、小さな天使のママの会を中心に相談に応じている。ひまわりの会と小さな天使のママの会でお話し会は定期的に開催していくこととし、新規相談者のニーズがあれば今後も不定期に開催したいと考えている。

個別相談・体験者への橋渡し：

お話し会参加にいたらず、メールでの対応で終わってしまう体験者もいる。お話し会参加にいたらずとも、いつでも話しを聞いてもらえる場があるということが重要であると考えられるため、体験者のニーズにそって4つの自助グループが協力して、関わっていくこととする。顔がみえない、一方的なやりとりになりがちであるため、十分注意をはらいながら対応していく。今回、初めて家庭訪問を実施した。今のところ、問い合わせの数が少ないので、希望があれば、対応していくが、今後、数が増えた場合の対策を考えておく必要がある。

家族同士の橋渡し：

今回、同じような体験をした方3人で逢っていただくという企画をした。精神的にまだ落ち着いているとは言えないため、話すことによって揺れ動き、しんどくなる部分もみられたが、今後もつながっていきけるようになっていったので、効果はあったと考える。その後、小さな天使のママの会にも参加できるようになったので、外にできるきっかけになったとも考えられる。現在は支援としては、傾聴が主であるが、少しでも早く前を向いて歩けるような支援ができるようにと、現在、グリーフケア専門士を取得中であり、体験者との関りにおいて、活かしていきたいと考える。

2-2-6 祖父母の楽しい上手な孫育て教室

1. 事業の目的

現在の子育て事情（育児方法や考え方）の情報を取り入れながら孫育てに関する理解を深める。若夫婦のよき援助者として、また祖父母自身が楽しみながら、適切な孫育児ができる。

2. 目標

- (1) 日ごろ、孫育てに関する悩みや疑問を参加者全体で話し合うことにより、参加者同士の交流を図り、気持ちを軽くしたりして経験の共有をはかる。
- (2) 他の参加者と話しあいやアドバイスの交換等により多角的な見方を知り、各人が良いと思える方法を考えることができる。
- (3) いまどきの孫育て、子育て、若夫婦等に対する付き合い方等の情報の入手をおこなう。

3. 実施状況

開催日時：平成28年8月6日（土）13時30分～16時00分

実施場所：石川県女性センター 2階 研修室1

講師：曾山小織、米田昌代、吉田和枝（修文大学 教授）

参加者：地域住民（0-3歳の孫をもつ祖父母）17名

4. 実施内容

参加者の経験の共有を図る話し合いの前に、パワーポイントにて今どきの育児に関する情報、事故や危険防止に関する情報を提供した。話し合いにおいては、参加者のプライバシーを守るため事前に準備した（花の名前の）名札をつけてもらい、お互いに花の名前で呼び合うこと、個人情報を出さないように説明し了解しあいを行った。3班に分かれ各参加者の自己紹介に続いて参加者が問題提起した内容（孫との接し方、最近の子育て、嫁・娘との付き合い方等）について話し合った。教員は各参加者の意見を全体の話題となるように進行し、子育て・孫育ての情報を提供し説明も行った。話し合い後、孫の事故や危険防止のためにビデオ上映も行った。最後に本教室に関するアンケート調査（匿名性）を行った。

5. 評価と今後の課題

今年度もアクセス・駐車場の面で女性センターを会場に開催した。研修室の広さやスタッフの人員等から14名を広報いしかわで公募したが応募者は22名であった。キャンセル待ちの方に連絡して、連絡が取れた3名を参加可能とした。前日にキャンセルの連絡が2名からあり、当日は1名が欠席だったため、最終的に18名が参加した。

教室の内容は、先にパワーポイントを用いて「最近の子育て事情に関する説明」と「孫の事故予防」の説明を行い、その後、参加者同士の話し合いを行ったため、参加者自身の子育てと現在の子育ての違いを交えながら話し合うことができたのではないかと考える。アンケートは17名が提出(94.4%)し、教室全体を通して「たいへん良かった」と答えた人は15名(78.9%)、「たいへん役に立つ」と答えた人は10名(55.6%)であった。役立つと思った内訳は、「今と昔の違いを認識できた」「話すことで自分も見つめることができた」「同世代の孫育てのエピソードが大変楽しかったし、考えさせられた」「本音が聞けて共感できた」等であった。教室の進め方は、話し合いを交えた現在の方法を10名(77.8%)が支持していた。開催時間の長さについては「ちょうどよい」が10名(77.8%)、「やや短い」が3名(16.7%)、「やや長い」が4名(22.2%)であった。教室への今後の希望として、3歳以上の孫育て教室の参加希望は「ぜひ参加したい」「参加したい」がそれぞれ7名ずつであった。開催の希望曜日は土曜日午後を希望する人が11名(61.1%)で最も多く、会場予約の関係もあり、引き続き土曜日午後を開催していきたい。

2-2-7 子育て どろっぷ・イン・さろん

1. 事業の目的

子育て中の母親に必要な支援と考えている、子どもと離れて過ごす場所を提供することと、子育て支援プログラム「完璧な親なんかいない (Nobody's Perfect : 以下 NP と略す)」を体験した母親が、これまでの NP グループの枠組みを越えて集まり、テーマを決めて話し合う場をもつことで、日ごろの子育てについて語り、悩みを共有し、解決策を自らみつけてもらう機会にすることを目的として、本事業を実施している。

2. 実施状況と実施内容

開催場所：北陸スウェーデンハウス 金沢モデルルーム（金沢市）

(1) どろっぷ・イン・るむ

概要：託児を行い、母親には一人でまたは、他の参加者と自由に過ごす時間・場所を提供する。スタッフも母親の相談に対応する。

対象者：子育て中の母親

スタッフ：西村真実子、米田昌代、金谷雅代、曾山小織、千原裕香、本部由梨、坂本洋子、前川弓枝（院生）

開催日時と参加人数：

回数	開催日	時間	参加人数	託児児童数
第1回	H28.6.20（月）	10：00～12：00	7名	6
第2回	H28.7.11（月）	10：00～12：00	7名	4
第3回	H28.8.8（月）	10：00～12：00	6名	8
第4回	H28.9.5（月）	10：00～12：00	8名	4
第5回	H28.9.27（火）	10：00～12：00	7名	4

(2) NP 親育ち・子育てを考える会

概要：託児を行い、NPプログラムの方式を取り入れたグループミーティングを行う。

対象者：NPプログラムに参加経験のある子育て中の母親

ファシリテーター：米田昌代、金谷雅代、西村真実子

記録等：曾山小織、千原裕香、本部由梨、坂本洋子、前川弓枝（院生）

開催日時と参加人数・話し合われたテーマ：

回数	日時	主なテーマ	参加人数
第1回	H28.6.20（月） 13：00～15：00	自分の気がかりを話そう・みんなの気がかりを聞こう 離乳食について、子どもの睡眠について	7名
第2回	H28.7.11（月） 13：00～15：00	子ども・きょうだいへの関わりについて	9名
第3回	H28.8.8（月） 13：00～15：00	仕事について 家事や家庭内での工夫	7名

第4回	H28.9.5 (月) 13:00～15:00	夫について	9名
第5回	H28.9.27 (火) 13:00～15:00	自分のコントロール（こだわりや感情）について	9名

3. 評価と今後の課題

(1) どろっぷ・イン・る一むの評価

他の参加者との交流を望む母親は、和やかに談笑していた。子育てしている仲間から話が聴けることで、自分自身の子育てを見つめなおしている様子が伺えた。子育てに関する様々な情報交換もできていた。一人で過ごせるスペースの利用希望者には、一人の時間を持って、日ごろ子どものいる環境では集中しにくいことが進み、晴れやかな表情で帰っていく参加者もいた。

どろっぷ・イン・る一むは、母親の交流の場としての機能と、一人になれる場の提供の2つの役割を果たしている。

(2) NP 親育ち・子育てを考える会の評価

参加者からは、「テーマや子育てについて改めて考えることができた」「毎回いろいろなことを知って、吸収できた」「子どもと一緒に自分も成長していきたい」など、子育てや考え方を前向きにとらえられている様子が伺えた。

この会を持つことにより、日ごろの悩みが共有でき、解決策の一助となる要素を参加者自身で「持ち帰り」、実践につながられている。

(3) 今後の課題

どろっぷ・イン・る一むのような形態の支援効果が参加者の反応からも得られているので、引き続き子育て中の母親が過ごせる場を提供して行く。

また、NP 親育ち・子育てを考える会では、子育ての困った場面や自分自身のことを考えられる時間が持て、考えを出し合い、経験を共有することで、エンパワーにつながっている。周知方法を工夫し、新たな参加者も得て本支援を展開していく。

2-2-8 お母さんと子どものためのアートセラピー体験

1. 事業の目的

本事業は、がんに罹患した母親が子どもと一緒に親子でヨガやオルゴールを体験するなどの楽しい時間を過ごすことによって、日ごろは話せない母親の気持ちや子どもの気持ちを伝え合い、親子の絆を深め、今まで以上に大切な時間を過ごすことができるよう、支援することを目的としている。また、企画の終盤には、母親の病気に対する不安や子どもや周囲との関わりにおける悩みを共有できる場として母親同士の交流の時間を設け、がん体験者への支援を目的としている。

2. 実施状況

開催場所: ミントレイノ

プログラム: 11時～13時; 親子ヨガ、オルゴール体験、

14時～15:10; 母親; 対話、子ども; 輪投げ、ボーリング大会、折り紙、絵本

担当者: 牧野智恵 (石川県立看護大学)、松本智里 (石川県立看護大学)、

松本友梨子 (がん看護専門看護師)、石川県立看護大学院生1名、4年生2名

日時	場所	参加者数【母親】	参加者数【子ども】
H28.8月7日(日)11:00～15:00	ミントレイノ	4名	6名(3歳2名)

3. 実施内容

時間	内容
11:00-11:45	親子ヨガ
11:45-13:00	オルゴール療法を親子で体験
13:00-14:00	昼食など自由行動
14:00-15:00	母親同士での対話タイム
	子どもは「アート」で遊ぶ*母親同士の話し合い中に別室で行う
15:00-15:10	アンケート記入

4. 評価と今後の課題

今年度は夏休みを利用し、オルゴール療法の実施できる白山市にあるミントレイノで本企画を実施した。夏休みということで参加者が増えると思ったが、逆に子ども達がさまざまな予定が入っているとのことで、参加者は4組に限られてしまった。しかし、参加してくださった親子は、当日をととても楽しみにしてくださっていた。

まず親子ヨガでは、子ども達は静かに何かをすることになれていないようで、走り回っている子ども達もいたが、途中から、子どもの楽しみを取り入れながらのヨガがはじまると、元気よく参加し、徐々になじんでいった。

次に、オルゴール体験では、親子と子どもを別に体験していった。子どもには、寝ながらオルゴールを体験してもらった。落ち着きのないこどもも、ここではオルゴールの音色で心も体も癒されていたようであった。母親は大オルゴールでの癒し体験をした後、子どもと一緒に寝ながらオルゴールを静かに体験し、親子の絆がより深まって用に見えた。子どもは子どもらしく母親に甘えている様子が印象的であった。最後には「また来たい」との声も聞かれた。

母親同士の対話では、日頃抱えている思いの表出や子どもをもつ母親だからこその悩みが語られる場面があった。また、他者の様々な体験を聞くことによって副作用が自分だけでないことに安堵する様子も見られ、知識を得る場となっていたとも考えられる。このような子どもをもつがん患者の支援の場は必要と考えるため、次年度も、できれば親子が集い参加できるイベントを継続して提供していきたい。

2-3 ワンストップサービス事業

1. 事業の目的

ワンストップサービス事業の目的は、石川県内の市町村、企業、NPO などの市民を対象とした地域貢献事業についての相談を受け付け、運営が円滑に行われるように支援することである。また石川県立看護大学が立地する地元かほく市の企業をはじめ、石川県内における看護・介護・福祉等の領域におけるさまざまな製品や用具の開発など、本学専任教員との共同研究について相談窓口を一本化し相談体制を整えることである。

2. 平成 28 年度の事業実績について

相談先	相談内容	対応
宝達志水町	特定検診・がん検診を受診した女性を対象とした骨密度測定に関する相談	長谷川昇教授 学生 3 名とともに測定と結果の説明および助言を行った。
宝達志水町	健康づくり推進員を対象とした介護予防の研修に関する相談	清水暢子助教 鳴子を使った音楽運動療法のミニ講話と実践を行った。
宝達志水町	健康づくり推進員を対象とした骨密度測定に関する相談	長谷川昇教授 学生 3 名とともに測定と結果の説明および助言を行った。

3. 今後の課題

石川県内の自治体、関係機関等のニーズを把握するとともに、本学教員の研究テーマとのマッチングを行い、地域の課題解決に向けた取り組みをより充実させていく必要がある。

3 国際貢献事業

5. 評価（総括）

（1）プログラムの妥当性

日系社会の高齢化と介護予防、ケアサービスの確立は日本同様の課題と考えられ、本研修の実施は研修生からも妥当であるとの評価を受けた。今回は研修員が医療従事者であることから、講義・演習内容を理解することが例年に比べ容易であったと思われる。また、フォローアップ調査に参加した看護大学教員と羽咋市社会福祉協議会職員は講義・演習・隣地実習において、少しでも現地の実情に合わせた内容にしたいという思いをもって行えた研修であった。

（2）研修時期、実施体制

- ①日系研修を約4週間の短期プログラムに改変し、介護予防のみならず介護技術の習得にウエイトを移してから5年目である。短時間でも研修員の高い意欲と、講義・演習内容をわかりやすく伝える講師陣の工夫、実習をサポートする羽咋市社会福祉協議会の充実したプログラムが噛みあってきたと実感できる年であった。
- ②研修時期は、日本のもっとも暑い時期でもあり、研修生の体力の消耗が懸念されたが、体調管理がよく無事研修日程を終えることができた。
- ③プログラムを立案する中では、例年に比べ開講時期が2週間遅くなったことによって、看護大学、羽咋市社会福祉協議会ともに、日程調整が非常に難航した。担当者のスケジュールを鑑みると、前年度までのように7月中旬にスタートし、お盆前に終了する日程が望ましい。
- ④研修生がi-padで自国のデータを持参していたが、大学環境にWi-Fiがなかったことから、i-pad内のデータの取り出しに時間がかかった。その他、職員のバックアップもあり、研修期間中の講義室やパソコン等の機器の確保、研修運営に大きな混乱は見られなかった。研修期間中の講義室やパソコン等の機器の確保、研修運営に大きな混乱は見られなかった。実習施設を調整している羽咋市社協から施設の研修生受け入れについても概ね前向きな反応を頂いている。

（3）研修生の準備状態

- ①今年度の研修生は両者とも日系3世であり、高い日本語会話能力があり、日常会話での意思疎通は十分に図れた。しかし、ブラジルからの研修生は、日本語で文章を作ることは難儀した様子である。パラグアイからの研修生に通訳をしてもらうことや、教員のサポートによって、伝えたい内容を日本語にすることができていた。
- ②中間のまとめを設け、学びを確認して目標の遂行状況を確認することは研修生の学習ニーズの確認には有効であった。アクションプランの作成過程にもこのことは有効であった。

（4）自立発展性の観点から

- ①研修受け入れ10年目を迎えた。研修の4ヶ月前にはパラグアイ国へフォローアップ調査に出向いたことから、より、パラグアイの実情に合わせて講義やディスカッションができる体制が整えられたと考える。しかし、ブラジルからの研修生は今回で3人目であり、地域格差が大きく、日系社会においてもパラグアイとは違った課題があるブラジル社会のこともわかってもらいたいと研修生からの要望があった。研修生の住む国や地域の特性をある程度理解し、ディスカッションをすることで、自国に戻ってからの具体的なアクションプランにつなげられると感じた。今回は保健師の資格を持つ方であったため、アクションプランが立てられた。是非、アクションプランを実現させ、自立発展していただきたい。
- ②来年度は、日本人会幹部向けの2週間程度の視察型の研修を実施することで高齢化福祉に対す

る理解を深めてもらう計画がある。今回のパラグアイからの研修生は日本人会幹部が、高齢者福祉制度やケアシステムなどを学びつつ、地域の病院や施設、デイサービスなど多様な機関を視察することで、これまでの研修生が中心となって行っている福祉ボランティアの活動を更に発展させていくことにつながると期待できると話されていた。是非そのようにつなげていただきたい。

(5) 日本社会への還元について

①パラグアイに関してはこれまでの研修生からのカントリーレポートやフォローアップ調査で現地を実際に視察することで、日系社会に関してははかかなり現状が把握できてきている状況にあった。しかし、今回はオリンピックの開催されていたブラジルの社会についても視野を広げることができた。これまでもブラジルからの研修生は2名いるものの、現役で保健師として働いている方が研修したのは初めてであり、ブラジルの保健医療福祉の実情に関して知ることができた。パラグアイとブラジルは同じ南米に位置する隣国であるが、やはり国によって現状や課題が異なることがわかっただけでなく、ブラジルは「格差社会」という言葉を何度も聞き、同じ国内においても住む地域によって環境や健康課題も異なることを知った。そのような国において、高齢者福祉はどうあるべきなのかを考えさせられた。世界レベルでの高齢者福祉について考える機会を得たとともに、現在の日本における高齢者福祉のあり方について改めて考え直す機会をいただいたと考える。

研修の光景（スナップ写真）

写真1 開講式における研修生の挨拶



写真2 羽咋市役所への表敬訪問

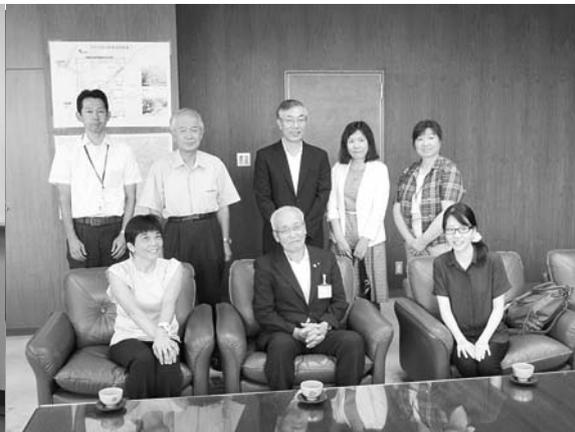


写真3 「高齢者の薬について」講義



写真4 閉講式後、関係者と記念撮影



平成28年度 日系研修「高齢者福祉におけるケアシステムと人材育成」日程

2016.7.22

日付	曜日	研修目標	午前(9:00-12:00)	午後(13:00-16:10)	場所
7月24日	日		来日		
7月28日	木		移動(横浜→金沢) 8:30～石川県立看護大学学長表敬訪問 1限(9:00～) 開講式 (担当:塚本・岩城・中道) (来学:JICA、岩城会長、松田常務、柳沢、宮下、中元) 開講式終了後 歓迎会(大学費用負担/担当:田淵・清水・金子・中道) 2限【講義1】 (地域看護学:石垣) 「日本の高齢者福祉や高齢者の生活について」	宿舎入居 PPの作成方法について 【討議】当該国の現状分析(カントリーレポート) カントリーレポートの発表準備(基礎看護学;木森、田淵)	かほく市 看護大学 (地域ケア委員)
7月29日	金				
7月30日	土		休日		かほく市
7月31日	日	1. 自国の高齢者ケアの課題を明らかにする	休日		かほく市
8月1日	月		カントリーレポートの発表準備(基礎看護学;木森、田淵)	3限(13:00～)カントリーレポート発表 3限:カントリーレポート発表準備(基礎看護学:木森・田淵)	看護大学 (基礎)
8月2日	火		10:00-11:00 羽咋市副市長表敬訪問 (JICA、岩城会長、松浦) 11:00-12:00 オリエンテーション(宮下)	13:30-17:00 羽咋市の概要と市内の状況について(岩城会長、岩本、運転手)	羽咋市
8月3日	水		9:00-10:00 もしも訪問ボランティア活動について(中橋) 10:00-12:00 もしも訪問ボランティア活動の見学と交流	13:30-15:00 地域の高齢者の特性 (立浦) 15:00-17:00 羽咋市社会福祉協議会の概要と地域福祉について(松田常務、松浦)	羽咋市
8月4日	木	2. 地域で暮らす高齢者が生活機能を維持・向上するための支援について学ぶ	【講義2】(老年看護学:川島) 「高齢者の心身機能の変化」 9:00-10:00 事前学習講義「地域の介護予防における運動機能の向上とその評価について」(宮下) 10:00-11:30 高齢者筋力トレーニング体験	【学内演習】 要介護者を支援するための介護技術の知識と技術(身体の不調の観察、環境の整え、体位変換、感染予防) (基礎看護学:田村、三輪) 13:00-14:00 外出支援サービス「友抱号」試乗見学(運転手・宮下) 14:00-15:00 老人福祉センター事業説明・館内見学(坂田) 16:30-18:00 老人福祉センター一益踊り	看護大学 (老年・基礎)
8月5日	金	3. 介護が必要となった高齢者に支援するために、身体的特徴・疾患の理解と介護の知識と技術を学ぶ			羽咋市
8月6日	土		休日	羽咋まつりへの参加 17:30-	かほく市・羽咋市
8月7日	日		休日		かほく市
8月8日	月		【講義3】(健康科学:長谷川) 「高齢者の薬と骨粗しょう症の予防・転倒予防について」 【学内演習】 「要介護者を支援するための介護技術の知識と技術(食事への援助、口腔ケア、排泄への援助)」 (老年看護学:磯、北山)	【講義4】(老年看護学:中道) 「高齢者に多い健康障害と治療内容」	看護大学 (健康・老年)
8月9日	火			まとめ1:前半の講義・実習を通して学んだことをまとめる (老年:川島・中道)	看護大学 (老年)

8月10日	水	9:00-10:00 事前学習講義:「在宅における介護者の現状と支援及び関わりについて」(宮下) 10:30-12:00 楽だの会 代表と意見交換(端代表のお宅)	祝日(山の日)	13:00-17:00 事前学習講義:「訪問看護における看護の留意点及び心構えについて(柳沢・角谷)」 「訪問入浴における介護の留意点及び心構えについて(中元)」	羽咋市
8月11日	木		祝日(山の日)		かほく市
8月12日	金			【講義5】(在宅看護学:桜井) 「在宅ケアと家族支援」	看護大学 (在宅)
8月13日	土		盆休み		かほく市
8月14日	日		盆休み		かほく市
8月15日	月		8月20日(6日)代休		かほく市
8月16日	火	2. 地域で暮らす高齢者が生活機能を維持・向上するための支援について学ぶ		8:30-17:00 見学実習:「訪問介護(身体介護中心)」 「訪問入浴」の実際 (中元) 17:00-18:00 まとめ (柳沢、角谷、中元)	羽咋市
8月17日	水	4. 地域における介護予防と在宅ケアシステムについて学ぶ		8:00-8:30 事前学習講義:「介護保険サービスにおける通所サービスの機能について」(宮下) 8:30-15:30 見学実習: 通所リハビリテーション (羽咋病院) 16:00-17:00 【講義6】「リハビリテーション概論」 (羽咋病院 理学療法士) 17:00-18:00 まとめ (宮下)	羽咋市
8月18日	木			8:00-8:30 事前学習講義:「介護保険サービスにおける通所介護の機能について」(宮下) 8:30-16:30 見学実習: 羽咋市デイサービスセンター 16:30-17:00 まとめ (宮下)	羽咋市
8月19日	金			9:00-13:00 「高齢者料理教室」(羽咋市健康福祉課・羽咋市食生活改善推進協議会)(宮下)	羽咋市
8月20日	土			9:30-13:00 男性の介護者のための介護教室 (高木・宮下)	羽咋市
8月21日	日			休日	かほく市
8月22日	月			8:30-9:00 事前学習講義:「介護保険サービスにおける小規模多機能居宅介護の機能について」(宮下) 9:00-17:00 見学実習:小規模多機能施設(わたぼうし) 17:00-18:00 まとめ(宮下)	羽咋市
8月23日	火			【講義7】(地域看護学:塚田) 「地域の実情に適した介護予防活動」	看護大学 (地域・在宅)
8月24日	水	5. 自国・自地域における実践可能なアクションプランの作成・発表ができる		【学内演習】アクションプランの作成・発表準備の指導 (阿部・徳田) 3限:アクションプラン発表準備(徳田・中道) 3限(13:00~)アクションプラン発表閉講式(担当:塚本・岩城・中道) (来学:JICA、岩城会長、松田常務、柳沢、宮下、中元) 送別会(JICA費用負担/担当:田淵・川端・千原・中道)	看護大学
8月25日	木			資料整理・帰国準備	看護大学 (地域ケア委員)
8月26日	金			14:00- 羽咋市長へ帰国挨拶(JICA、岩城会長、宮下) 金沢へ移動	羽咋市
8月27日	土			東京へ移動	
8月28日	日			帰国	

3-2 JICA 青年研修

「地域保健医療実施管理」コース

1. はじめに

JICA 青年研修事業は、発展途上国の人材育成を促進する目的で、将来の国づくりを担う若手人材を日本に招き専門分野の研修を提供するものである。2016年にカンボジア 15名の研修員を迎え「地域保健医療実施管理」コースが本学において実施された。

実施に際しての地域保健医療に関する問題意識としては以下である。

- (1) 近年、カンボジアでは、母子保健対策の推進により乳幼児死亡率は徐々に改善し、多産多死社会から少産少死社会へ移行のきざしを見せており、今後、平均寿命の延伸に伴い疾病構造の変化が予測される。一方、依然として感染症リスクは深刻な状況にある。
- (2) 結核に関しては、2010年のデータによると、死亡率、罹患率、有病率とも ASEAN 諸国の中では最も高く、引き続き、結核に対する対策の充実が求められている。
- (3) 疾病構造の変化に備える循環器疾患や糖尿病等の生活習慣病の対応などについては、端緒についたところであり、今後の充実が必要である。また、安全な水へのアクセス、トイレの改善など、基本的な公衆衛生機能の充実も必要である。
- (4) 地域の保健医療体制を整え、保健サービスの実行に向けて推進できる人材確保が課題である。

2. 研修目標

将来のリーダーとして感染症ならびに生活習慣病などの予防医学・公衆衛生分野における課題解決を担う青年層の知識と意識の向上を目指し当該プログラムに参加することにより、以下の項目の達成を目標とした。

- (1) 予防医学、公衆衛生の概念を理解し、意識が向上する。
- (2) 予防医学、公衆衛生の向上のために、リーダーとしての必要な知識と意識が身につく。
- (3) 地域医療・保健のシステム、制度の重要性を理解し、自国の状況と課題に応じた予防活動を行うための基本的な考え方が身につく。

3. 研修実施体制

- (1) 研修期間：2016年11月30日～2016年12月13日
- (2) 研修員：15名の地域保健医療関連の医療従事者および保健医療行政に関わる人
保健行政局職員1名、医師2名、助産師4名、看護師8名
研修監理員：2名 福原康太・田井雅代
- (3) 企画・実施担当(講師含む)
本学教員9名：石垣和子、武山雅志、長谷川昇、大木秀一、塚田久恵、岩城直子、桜井志保美、徳田真由美、金子紀子
視察施設担当者17名：菊池修一、土田壽久(石川県庁健康福祉部)、長基明子、中村直大(コメヤ薬局)、亀井淳平、石垣靖人、古家大祐、川嶋政広(金沢医科大学病院)、ト部健(公立松任石川中央病院)、橋本宏樹(公立つるぎ病院吉野谷診療所)、沼田直子、北西

陽一（石川県南加賀保健福祉センター）、岡本佳代子（小松市予防先進部いきいき健康課すこやかセンター）、田畑正司、中西博子（石川県予防医学協会）、東 和美（白山松任訪問看護ステーション）、倉本早苗（石川県保健環境センター）
事務局（地域ケア総合センター）1名：塚本晃弘

4. 研修内容

研修の全体概念図は図1、研修日程は表1に示すとおりである。

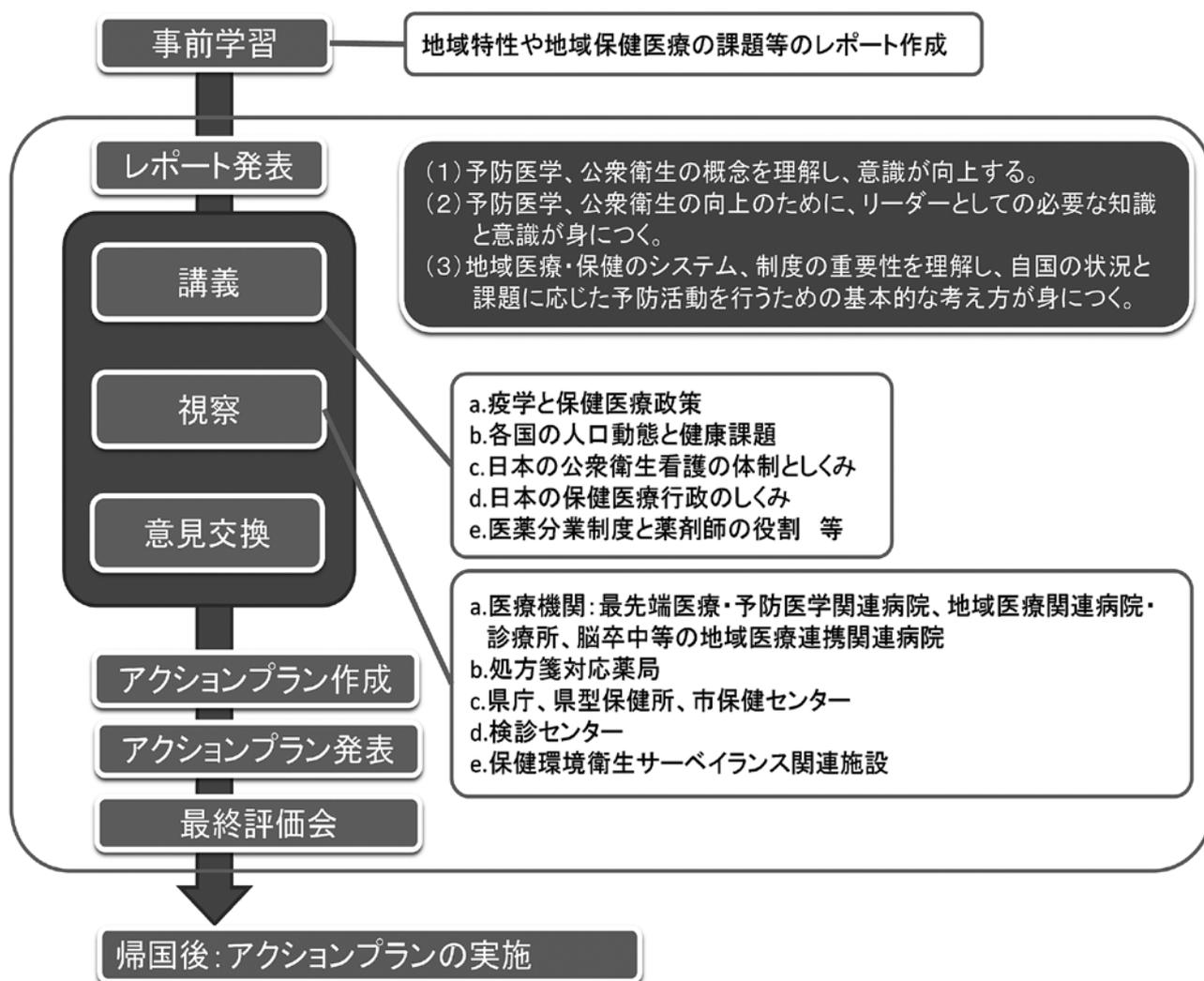


図1 2016年JICAカンボジア青年研修 全体概念図

表1 2016年JICAカンボジア青年研修「地域保健医療実施管理」日程表

月	日	曜日	午前	午後
11	30	水	10:45~11:15 開講式 11:30~12:45 歓迎会(昼食兼)	13:00~16:00カントリーレポート発表 (13:00~15:00)
12	1	木	9:00~12:00【講義】(石垣) 石川県立看護大学における人材育成 人口動態に見る国の健康課題	13:00~14:30【講義】(塚田・金子) 日本の公衆衛生看護の体制としくみ 14:40~16:10【講義】(長谷川) 医薬分業制度と薬剤師の役割
	2	金	9:00~12:00【講義】(大木) 疫学と保健医療政策	14:00~16:00【講義・見学】(コメヤ薬局泉店) 医薬分業の実際
	3	土	自主研修	
	4	日	自主研修	
	5	月	10:00~12:00【講義】(石川県健康福祉部) 日本の保健医療行政のしくみと医療保険制度について	14:00~16:00【見学】(金沢医科大学病院) 最先端医療と予防医学(三次医療)の実際
	6	火	9:00~12:00【見学】(公立松任石川中央病院) 地域医療(二次医療)と地域医療連携(循環器・脳卒中等)の 実際	14:00~16:00【見学】(公立つぎ病院吉野谷診療所) 地域医療(一次医療)の実際
	7	水	9:00~11:30【見学】(石川県南加賀保健福祉センター) 公衆衛生の実際①保健所の役割と業務	13:00~16:00【見学】(小松市予防先進部いきいき健康課すこやかセンター) 公衆衛生活動の実際②市町保健センターの役割と業務
	8	木	9:00~11:30【講義・演習】(桜井・徳田) 振り返りとまとめ *石川県立大学	14:00~16:00【見学】(石川県予防医学協会) 検診センターの役割と業務
	9	金	9:30~11:30【見学】(白山松任訪問看護ステーション) 地域医療と訪問看護の役割	14:00~16:00【見学】(石川県保健環境センター) 保健環境サーベイランスの実際
	10	土	自主研修	
	11	日	自主研修	
	12	月	9:00~16:00【講義・演習】(桜井・徳田) 全体振り返り、レポート作成	
	13	火	9:15~10:15JICA評価会 10:30~12:30 成果発表	12:30~13:00 閉講式、13:00~14:00 送別会

5. 研修評価

本研修は、前年度に実施されたプログラムを継承したものであり、短期研修で予防医学的な専門技術研修ではなく、予防、公衆衛生、地域医療、地域医療連携をキーワードとした関連施設の視察と講義を取り入れたプログラムとなっていた。それに加え、今年度は「石川県立看護大学における人材育成」についての講義を新たに加えた。ジョブレポート及びカントリーレポートなどからカンボジアの国内の健康問題として、生活習慣病の増加、感染症、産後出血の多さなどがあげられ、加えて医療者の不足もあり、その課題解決として、日本の医療体制や予防医学、衛生管理の現状を知ってもらうことは、本研修の目的と合致するものであった。医療者の不足の中で、特に、保健師という職種については該当する職種がみあたらないという現状から、保健師の役割や業務、養成についての新たな学びがあったことは、疾病の予防だけではなく、母子保健の向上にもつながるものと思われる。また、今回の構成員に看護職が多く、4名の助産師がいたことから、今後、自国での母子保健活動をいかにすすめていくかの指針になったものと思われる。さらに、本学の母性看護学の教員により、母

子健康手帳や母乳育児、カンガルーケアについての補講があり、より具体的な学びになったものと思われる。一方、日本の最先端医療や治療を見たことも有意義であった。三次医療の現場で最新の医療機器や先端医療を見学したことに加えて、一次医療の現場にも優れた医療機器が設置されていることに対して驚きと羨望があった。全体的に短期間で目的を達成するための内容が豊富に盛り込まれたプログラムであったが、時間的制約もありタイトなスケジュールの中での研修となった。青年研修の目的から考えると広く浅く学び、刺激を得、今後さらに深く学ぶ機会となったと思われ、研修員の満足度は高かった。アクションプランでは、発表すべて今回の学びをうまく取り入れ、帰国後に自国で自分たちが実施可能な無理のない計画となっていた。今回の研修員は最年長で33歳、平均年齢28歳と次世代の予防医学・公衆衛生分野における実施体制の課題解決を担う地域や国のリーダー的存在として、活動を行うことが期待される。

JICA が実施した研修員からの評価の中から、本学の研修に関する項目については以下のとおりである。

1. あなたもしくは所属機関が案件目標を達成する上で、プログラムのデザインは適切だと思いますか

	←適切である		適切ではない→	
点数	4	3	2	1
人数	6	9	0	0

2. 研修期間は適切でしたか

点数	長い	適切	短い
人数	0	14	1

3. 本研修の参加人数は適切でしたか

点数	多い	適切	少ない
人数	0	14	1

4. 本研修において研修参加者の経験から学ぶことができましたか

	←できた		できなかった→	
点数	4	3	2	1
人数	7	7	0	1

5. 視察や実習など直接的な経験を得る機会が十分ありましたか

	←十分あった		なかった→	
点数	4	3	2	1
人数	6	9	0	0

6. 討議やワークショップなど、主体的に参加する機会が十分ありましたか。

	←十分あった		なかった→	
点数	4	3	2	1
人数	3	11	1	0

7. 講義の質は高く、理解しやすかったですか

	←良かった		不十分だった→	
点数	4	3	2	1
人数	3	12	2	1

8.テキストや研修教材は満足するものでしたか

	←満足した		満足していない→	
点数	4	3	2	1
人数	13	2	0	0

9.本研修で得た日本の知識・経験は役立つと思いますか

A: はい、直接的に活用することができる B: 直接的に活用することはできないが、業務に応用できる C: 直接的に活用、応用することはできないが、自分自身のためになる D: いいえ、全く役立たない				
点数	A	B	C	D
人数	5	8	1	0

4 そ の 他

4-1 かほく市との包括的連携協定に関わる取り組み

1. 平成 28 年度の取り組みについて

平成 22 年 10 月に石川県立看護大学とかほく市が包括的連携協定を締結し、本格的な活動を開始して 6 年目を迎えた。

本年度は石川県立看護大学が幹事となり、2 回の協議会を開催した。

6 月 3 日（金）第 1 回協議会：平成 27 年度の事業実績報告と平成 28 年度事業案について

12 月 12 日（月）第 2 回協議会：平成 28 年度事業の進捗状況報告と平成 29 年度の計画立案について

かほく市から継続 9 事業、新規 2 事業、石川県立看護大学より新規 1 事業、継続 2 事業を提案し実施された。

	かほく市主催事業	看護大担当	看護大主催事業
1	かほく市ケーブルテレビ事業（企画情報課）	垣花准教授	
2	健康ブランド化事業（健康福祉課、長寿介護課）	武山教授 垣花准教授	
3	いきいきシニア活動推進事業（長寿介護課）	織田准教授	
4	地域支援事業（長寿介護課）	川島教授 塚田准教授	
5	介護予防サポーター養成講座（長寿介護課）	塚田准教授	
6	家庭介護者教室（長寿介護課）	桜井准教授	
7	かほく市体力テスト（生涯学習課）	長谷川教授	
8	問題を抱える子ども等の自立支援事業（学校教育課）	武山教授 西村教授	
9	教育相談事業（学校教育課）	武山教授	
10	地域少子化対策強化交付金事業（子育て支援課）	西村教授	
11	道の駅活性化（産業振興課）	垣花准教授	
12		塚田准教授	高齢者と看護学生との交流事業
13		武山教授 塚田准教授	子育て支援学生ボランティア活動（わくわく運動会、託児ボランティア）
13		武山教授	災害につよい街づくりフォーラム

新規事業である「健康ブランド化事業」「いきいきシニア活動推進事業」「災害につよい街づくりフォーラム」について述べる。

「健康ブランド化事業」では、かほく市とイオンモールかほく、看護大が連携してとかく運動不足になりがちな冬場の健康づくりを目的に「か歩く健康ウォーキング事業」を行った。多くの市民の皆様にご参加いただき、ミニレッスンや健康チェックを実施した。平成 29 年度も継続して取り組む予定である。

「いきいきシニア活動推進事業」においては「シニアの力と経験知～in かほく」と題した「いきいきシニア講演会」で石垣学長が講師を務めた。平日にもかかわらず多くの肩に来場いただき、本テーマへの関心の高さを改めて実感した。

自主防災組織が熱心に活動されているかほく市においてその活動内容を共有したいという目的で「災害につよい街づくりフォーラム」を初めて開催した。写真家の高橋智裕氏の基調講演に引き続き、かほく市役所と 4 地区の防災訓練の報告そして災害ボランティア・サークルふたばの活動報告を行った。それぞれの工夫をうまく今後の活動に活かしていきたい。

2. 平成 29 年度に向けての事業実施についての検討

平成 28 年度に始まった「健康ブランド化事業」については看護大としても色々な教員が取り組んでいるテーマでもありその実績を踏まえてきちんとした形にしていきたいと考えている。ただ規模の大きなものであるため今年度は研究会として多くの教員が関わって英知を結集させていきたいと考えている。

「健康」「介護」「いきいきシニア」「教育」「災害」などさまざまなテーマについて連携事業が行われているが、ただ単にお手伝いに終わるのではなく各教員の研究テーマとの関係を整理した上、長期的な視点に基づいて進めていくことが必要だと感じている。

4-2 石川县委託事業・協力事業

「介護職員による喀痰吸引等の研修事業の実施協力」

1. 石川県における介護職員等への喀痰吸引等の研修事業の成果

本研修事業は石川県社会福祉協議会福祉総合研修センターが石川県より研修委託を受け、石川県健康福祉部長寿社会課から本学に実施協力要請があり、技術支援ならびに運営協力を行って研修開催に至り6年が経過した。本事業には不特定の対象に喀痰吸引等を実施できる「第1号研修・2号研修」と、特定の対象にしか実施できない「第3号研修」がある。「第1号研修・2号研修」の研修の内容は図1に示すとおりである。講義は座学（一部デモンストレーションあり）で学び、演習はシミュレータ人形を活用して技術を習得する研修内容の構成である。

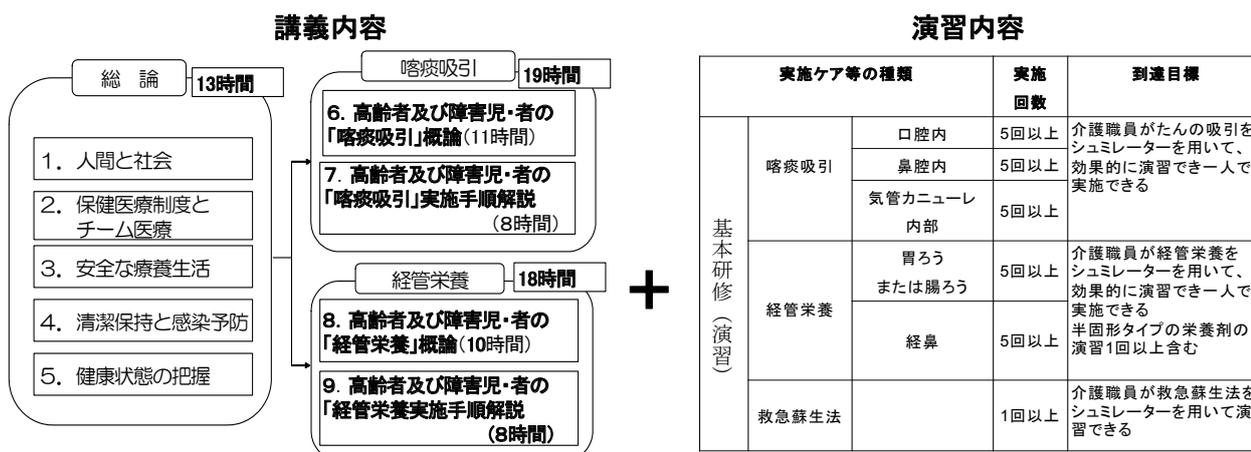


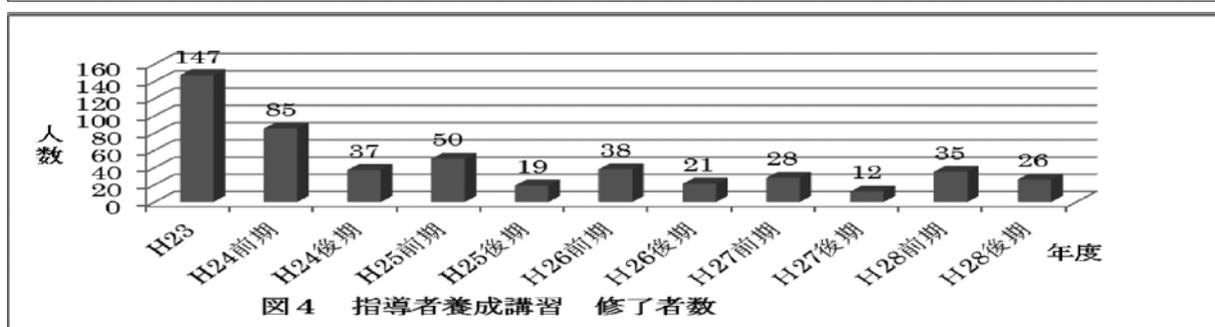
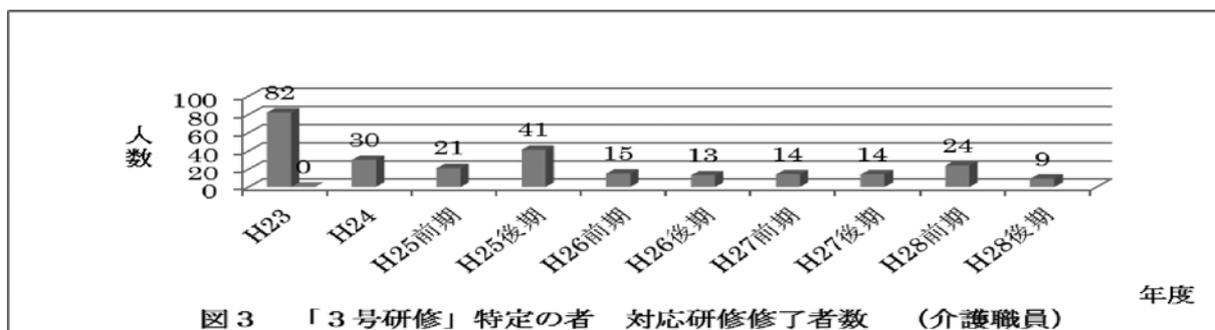
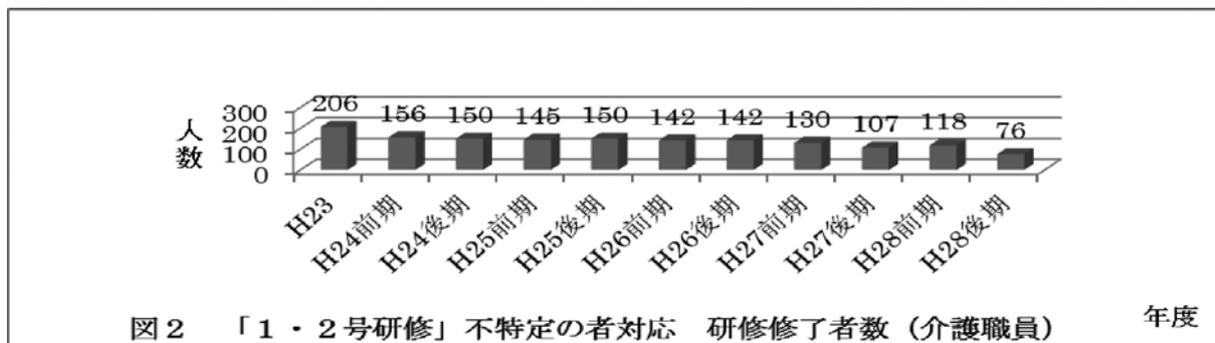
図1. 基本研修の講義と演習の内容

本学では平成25年度には「医療的ケア」の手順解説を中心にテキスト・DVDの作成に取り組んだ。喀痰吸引や経管栄養を実施する上で必要な人体の構造や機能、安全対策、感染防御、基本的なケア等に関して、可視化できる教材を準備し、看護職員と介護職員の連携を重視した教育内容を試行してきている。平成26年度、平成28年度と改定を重ねている。平成27年度からは石川県立看護大学看護キャリア支援センターで感染管理認定看護師教育課程が開設され、教育を担当している特任教員（感染管理認定看護師）等に本研修の講義も一部依頼できるようになった。

また、講義会場は石川県の特性を反映して加賀会場と能登会場の2箇所を増やし、演習のみ石川県立看護大学内にて実施することとなった。開催時期は5月開講の前期・9月開講の後期の年2回開催している。具体的な講義・演習は3～4名のグループ学習を基本とし、受講生同士が互いに刺激し、それぞれが教えあうことを意図している。また、特定の者対応の「3号研修」も2日間集中講義で前期・後期の2回開催している。

「指導者養成講習会」（ほとんどが看護職員）も同様に前期・後期の年2回開催している。指導者は講習会修了後、引き続き介護職員の研修事業に参加することを条件とし、実地研修までに指導者自身の指導力が高まるようプログラムしている。

本研修では、介護職員・看護職員ともに根拠を理解してもらうことを重視し、知識・技術の根拠となる文献等は教育機関に所属する講師が適宜準備している。また、感染管理認定看護師や救急蘇生の資格を持つ看護職、平成23年度から平成28年度までの6年間に研修を受講した介護職員と指導者養成講習の修了者（主に看護師）数の推移は図2～4に示すとおりである。



平成 26 年度までは介護職員の受講者数は概ね定員数を満たしていたが、平成 27 年度から定員が割れるようになってきている。また、「第 3 号研修」の受講者や指導者養成講習の受講者の伸びも低下してきている。ある程度の修了者を輩出することができたことと同時に介護現場が深刻なスタッフ不足で長期にわたる研修に出せないことが推測できる。また、介護現場に喀痰吸引等の医療的ケアを必要とする対象者の状況に変化が生じていることが予測される。

基本研修終了後、アンケート調査を継続的に実施し、学習環境や学習内容・勧め方、指導者の対応等について意見を集約している。石川県立看護大学を活用した学習環境に関しては 90%以上の高い満足度が得られているものの、能登北部地域や南加賀地域からの受講生には遠距離であることが負担との意見は引き続き見られている。

2. 本研修事業の今後の課題

本研修事業を継続するためには、講義担当できる講師、演習・実地研修において指導できる指導者の継続的確保が課題である。指導者確保は、現場における「実地研修」の実施、ひいては介護職員が「認定特定行為従事者」として登録できるか否かを大きく左右する。図 3 に示したように指導者の養成数は年々減少している現状である。しかしながら、平成 28 年度からは介護福祉士養成課程のカリキュラムに「医療的ケア」が必修として配当されるようになり、養成校の役割拡大が期待される場所である。

今後、石川県立看護大学に期待されることは、喀痰吸引等研修事業のさらなる充実のために研究的視点も活用しながら、教育教材の充実、今までの受講者の実践力担保のためにフォローアップ研修等に取り組むことであると考えている。平成 29 年度の地域ケア総合センター事業に指導者向けのフォローアップ研修を組み込む予定にしている。

石川県立看護大学附属地域ケア総合センター

事業報告書（第14巻）

平成29年12月発行

発行：石川県立看護大学附属地域ケア総合センター

〒929-1210

石川県かほく市学園台1丁目1番地

Tel.076-281-8308 Fax.076-281-8309

© 2015 Ishikawa Prefectural Nursing University.
All rights reserved.

著作権は石川県公立大学法人に帰属する。

